

箱崎 55

— 箱崎遺跡第43次・77次調査の報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1345集

2018

福岡市教育委員会

箱崎 55

— 箱崎遺跡第43次・77次調査の報告 —



調査略号 HKZ-43・HKZ-77

調査番号 0356・1519

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも箱崎遺跡には、弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う箱崎遺跡第43次と第77次発掘調査について報告するものです。第43次調査では平安時代末～鎌倉時代初期の溝や土坑などを検出しています。第77次調査では建物の基礎と考えられる柱穴列をはじめ、井戸も數基検出しました。これらは平安時代から鎌倉時代にかけての中世集落跡を考える上での手がかりになるとともに、箱崎地区の歴史の解明にも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は福岡市教育委員会が東区箱崎1丁目2697-1における共同住宅建設にともなう事前調査として平成15年度に実施した箱崎遺跡第43次調査と、箱崎1丁目2708-1における共同住宅建設にともなう事前調査として平成27年度に実施した箱崎遺跡第77次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位はすべて磁北である。
3. 検出した遺構については、調査時の検出順に通し番号を付した。本書ではこの番号に遺構の性格を示す用語を付して記述する。遺構の呼称は井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSPと略号化している。
4. 本書で記述する貿易陶磁の分類は以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会2000「大宰府条坊跡XV - 陶器器分類編 -」太宰府市の文化財第49集
5. 本書で使用した遺構実測図は大塚紀宜(43次)、清金良太・松崎友理(77次)が作成した。
6. 本書で使用した遺物実測図は大塚・山崎賀代子(43次)、松崎・平川敬治(77次)が作成した。
なお、Fig24-185については福岡大学人文科学系研究科博士課程(前期)の輪内寛が作成した。
7. 製図は大塚・山崎(43次)、松崎(77次)による。
8. 本書使用の写真は大塚(43次)、清金・松崎(77次)が撮影したものである。
9. 第2章は大塚、第3章第II節3は福岡市埋蔵文化財センターの松園菜穂が執筆し、その他の執筆および編集は松崎が行った。また、編集では三浦悠葵の協力を得た。
10. 本書に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理されるので活用されたい。

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	第43次	遺跡略号	HKZ-43
調査番号	0356	分布地図図幅名	箱崎34	遺跡番号	2639
申請地面積	199 m ²	調査対象面積	83.1 m ²	調査面積	83.1 m ²
調査地	東区箱崎1丁目2697-1			事前審査番号	15-2-41
調査期間	平成15(2003)年11月21日～平成15年12月15日				

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	第77次	遺跡略号	HKZ-77
調査番号	1519	分布地図図幅名	箱崎34	遺跡番号	2639
申請地面積	740 m ²	調査対象面積	394 m ²	調査面積	333 m ²
調査地	東区箱崎1丁目2708-1			事前審査番号	26-2-944
調査期間	平成27(2015)年8月20日～平成28(2016)年2月10日				

本文目次

第1章 箱崎遺跡の立地と環境	1
第2章 第43次調査の記録	
I. はじめに	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査組織	3
II. 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構・遺物	4
(1) 土坑	4
(2) 溝状遺構	11
(3) その他の遺物	11
(4) 銭貨・金属製造物	12
図版	13
第3章 第77次調査の記録	
I. はじめに	17
1. 調査に至る経緯	17
2. 調査組織	17
II. 調査の記録	18
1. 調査の概要	18
2. 遺構・遺物	21
(1) 建物跡	21
(2) 井戸	26
(3) 土坑	34
(4) 溝	45
(5) ピット	48
(6) その他の遺物	50
(7) 金属製造物	51
3. 箱崎77次調査出土資料の保存処理と材質調査	52
4. 小結	56
図版	57

挿図目次

第1章

Fig.1	箱崎遺跡と周辺遺跡（1／50,000）	1
Fig.2	箱崎遺跡調査区位置図（1／5,000）	2

第2章

Fig.1	第43次調査地点位置図（1／4,000）	3
Fig.2	第43次調査区全体図（1／60）	5
Fig.3	遺構実測図1（1／40）	7
Fig.4	遺構実測図2（1／40）	8
Fig.5	遺物実測図1（1／3）	9
Fig.6	遺物実測図2（1／3）	10
Fig.7	遺構実測図3（1／40）	11
Fig.8	遺物実測図3（1／3）	11
Fig.9	遺物実測図4（1／3）	12
Fig.10	遺物実測図5（1／3・1／2）	12

第3章

Fig.1	第77次調査地点位置図（1／1,000）	18
Fig.2	第77次調査区第1面遺構配置図（1／150）	19
Fig.3	第77次調査区第2面遺構配置図（1／150）	20
Fig.4	第77次調査区I・II区南壁土層断面図（1／80）	21
Fig.5	SB01実測図（1／40）	22
Fig.6	SB02実測図（1／40）	23
Fig.7	SB01・02出土遺物実測図（1／3・1／2）	24
Fig.8	SE1067実測図（1／50）および出土遺物実測図（1／3・1／2）	25
Fig.9	SE1128実測図（1／50）および出土遺物実測図（1／3）	26
Fig.10	SE1183・1189実測図（1／50）および出土遺物実測図（1／3・1／2）	27
Fig.11	SE2040実測図（1／50）および出土遺物実測図（1／3）	28
Fig.12	SE2075実測図（1／50）および出土遺物実測図（1／3）	30
Fig.13	SE2079実測図（1／50）および出土遺物実測図（1／3・1／2）	31
Fig.14	SE2085実測図（1／50）および出土遺物実測図①（1／3）	32
Fig.15	SE2085出土遺物実測図②（1／3・1／2）	33
Fig.16	SK1018実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3・1／2）	34
Fig.17	SK1046実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）	34
Fig.18	SK1076実測図（1／10）	35
Fig.19	SK1076出土錢貨拓本（原寸）	37

Fig.20	SK1087実測図（1／30）	38
Fig.21	SK1087（西から）	38
Fig.22	SK1087出土遺物実測図（1／3）	38
Fig.23	SK1097実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）	39
Fig.24	SK1112・1134実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3・1／2）	40
Fig.25	SK1188実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）	41
Fig.26	SK2001実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）	43
Fig.27	SK2057実測図（1／40）および出土遺物実測図①（1／3）	44
Fig.28	SK2057出土遺物実測図②（1／2・1／3）	45
Fig.29	SK2069実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）	46
Fig.30	SD1070実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）	46
Fig.31	SD2071実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3・1／2）	47
Fig.32	SP2103実測図（1／20）および出土遺物実測図（1／3）	48
Fig.33	SP出土遺物実測図（1／3）	48
Fig.34	特殊遺物実測図①（1／2・1／3）	49
Fig.35	特殊遺物実測図②（1／2）	50
Fig.36	出土銭貨拓本（原寸）	51
Fig.37	金銅製環状製品の蛍光X線分析結果	55
Fig.38	青銅製仏像の蛍光X線分析結果	55
Fig.39	埴堀の蛍光X線分析結果	55

表 目 次

第3章

Tab.1	SK1076出土銭表	35
Tab.2	SK1076出土銭貨一覧表	36

図版目次

第2章

PL 1	1 調査区西半全景（西から） 2 調査区東半全景（西から） 3 調査区西壁（東から）
PL 2	1 SK-01（西から） 2 SK-02上面（西から） 3 SK-02（西から）
PL 3	1 SK-03（北から）

2 SK-19 (南から)

3 SK-33 (東から)

PL 4 1 SK-36 (南から)

2 SK-43 (南から)

3 SK-50 (南から)

第3章

PL 1 1 I区第1面全景 (北西から)

2 I区第2面全景 (北西から)

PL 2 1 II区第1面全景 (北西から)

2 II区第2面全景 (北西から)

PL 3 1 III区第1面全景 (北西から)

2 III区第2面全景 (北西から)

PL 4 1 IV区第1面全景 (南東から)

2 IV区第2面全景 (南東から)

PL 5 1 SB01 (東から)

2 I区SB02 (北から)

3 II区SB02 (西から)

PL 6 1 SE1067 (南東から)

2 SE1183・1189 (南から)

3 SE2040 (北から)

PL 7 1 SE2085 (北から)

2 SD2071 (西から)

3 SP2103 (東から)

PL 8 出土遺物

第1章 箱崎遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層と呼ばれる砂丘上に立地し、この砂層は箱崎遺跡から室見川河口付近まで分布している。砂層上には多くの遺跡が立地しており、箱崎遺跡から南に続く砂丘上には吉塚遺跡や堅粕遺跡、博多遺跡群などがある。

箱崎遺跡は筥崎宮を中心として、南北約1000m、東西約500mの範囲に広がり、砂丘の標高は約2.0～3.5mを測る。砂丘の形成時期については自然科学的知見から縄文時代晚期を下らないと考えられているが、本遺跡で明確な遺構が出現するのは古墳時代前期になってからで、砂丘の東側斜面で竪穴住居跡や周溝墓などが認められる。本格的な発展は筥崎宮が923（延長元）年に飯塚市筑穂にあった大分宮から遷座創建されることによって始まる。筥崎宮を中心とした門前町として発展し、中世は博多と同じように对外交易の拠点となって栄えていた。11世紀代では遺構の広がりが砂丘東側の緩斜面上で認められ、宇美川の河口にあったとされる「筥崎ノ津」との関係が指摘されている。砂丘西側斜面に遺構が拡大するのは12世紀中頃で、以降14世紀初頭頃まで遺跡のはば全域に遺構の広がりが確認されている。13世紀後半には砂丘西側緩斜面で焼土整地層が形成されている。これは1274年の文永の役の焼き討ちによるものと考えられ、筥崎宮とその一帯が焼失したことを示唆している。

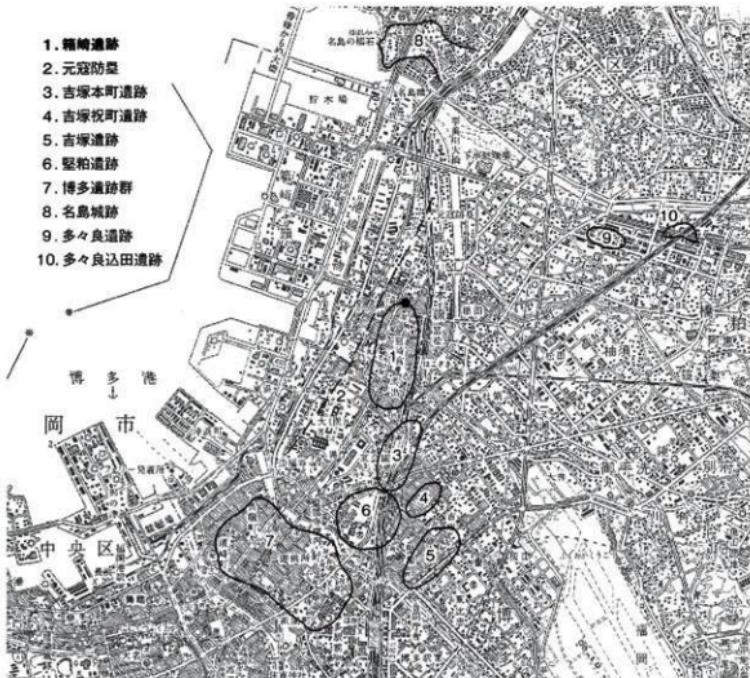


Fig. 1 箱崎遺跡と周辺遺跡 (1 / 50,000)

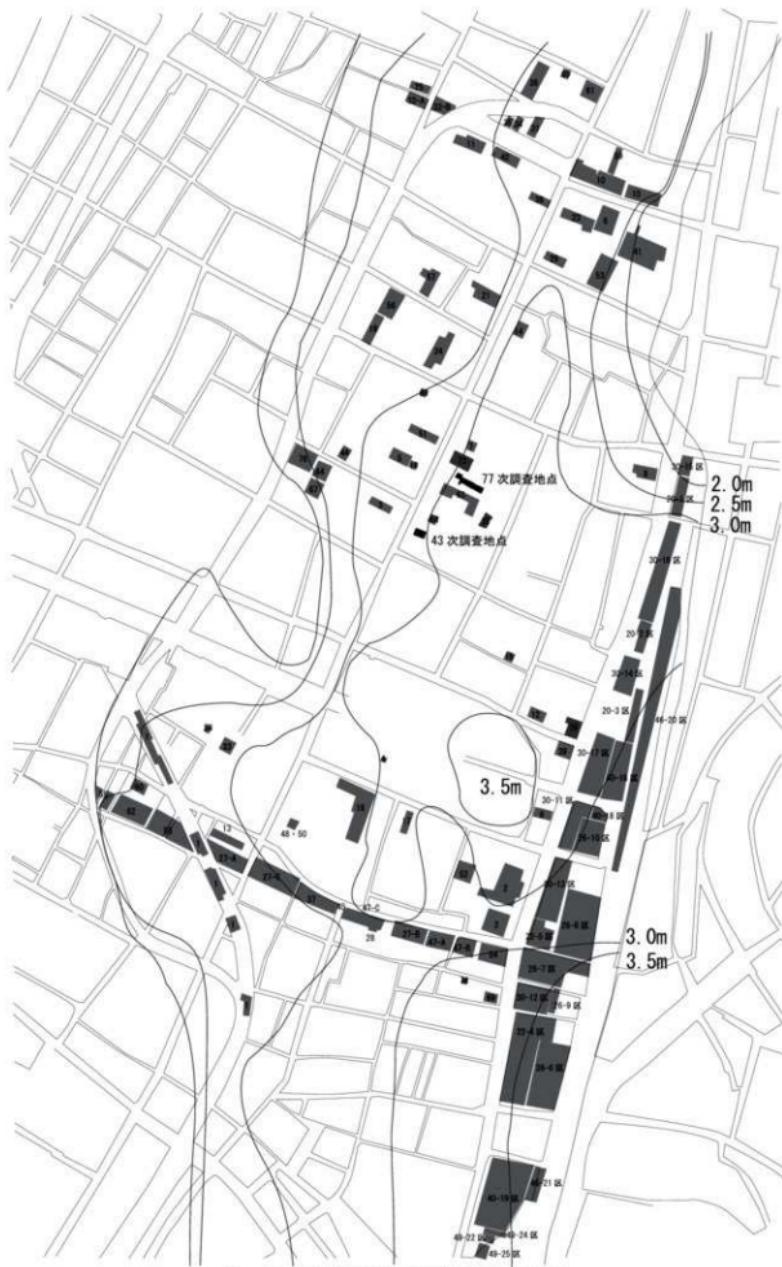


Fig. 2 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)

第2章 第43次調査の記録

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成15年4月14日、個人より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（当時）に対して、福岡市東区箱崎1丁目2697-1における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会が提出された。

（事前審査番号15-2-41）これを受け埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていたことから、平成15年11月11日に試掘調査を行い、その結果現地表の80cm下で構造を確認した。この試掘結果を受けて申請者と埋蔵文化財課で協議を行い、建物の基礎部分について発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は国庫補助金の適用を受け、平成15年11月21日に開始し、同年12月15日に調査を終了した。なお、埋蔵文化財課は組織改編のため平成24年4月1日付で経済観光文化局へ移管し、整理・報告作業は新組織下で行った。

2. 調査組織

組織名称・所属はいずれも調査当時のものである。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査統括：埋蔵文化財課 課長 山崎純男

調査第2係長 田中壽夫

調査庶務：文化財整備課 管理係 御手洗清

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係 米倉秀紀・久住猛雄

調査担当：埋蔵文化財課 調査第2係 大塚紀宜

整理主体：福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

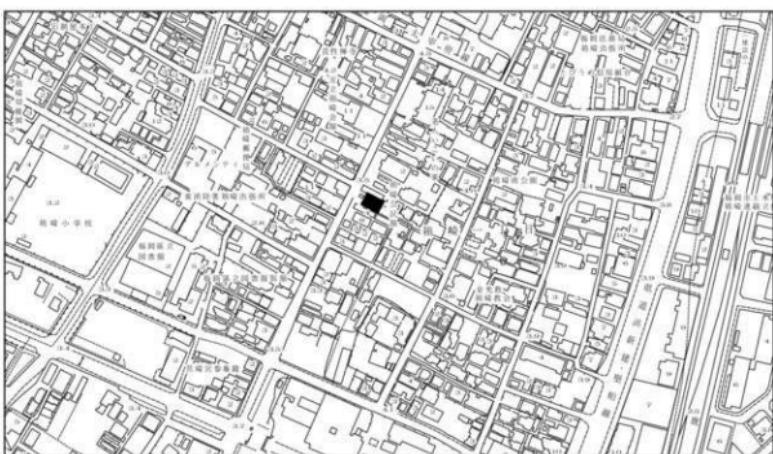


Fig. 1 第43次調査地点位置図 (1/4,000)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

箱崎遺跡は宇美川下流左岸に形成された砂丘上に位置しており、現在の宮崎宮を中心に南北1.5kmにわたって延びている。43次調査地点はその中間付近に位置し、宮崎宮の北側150m付近に位置する。遺跡は全体に近世以降に陸化と都市化が進み、現在では砂丘の形状をはじめとする旧地形の痕跡を現地で見出すことは困難である。

43次調査地点は箱崎地区の砂丘尾根部を走る旧街道沿いに面しており、敷地形状は町家特有の、間口が狭く奥に長い形状を呈する。敷地面積は198.76m²である。調査はこのうち建物が建てられる範囲で旧地下室部分を除いた83.1m²を設定した。調査は北西側半分より開始し、北西側部分の調査終了後調査区を反転し、南東側部分の調査を行った。

43次付近の現地は標高3.2mで、調査では表土・搅乱層の下、標高2.4~2.6mで褐色砂層に達し、同層の上面で遺構を検出している。遺構は土坑・溝・柱穴を主とし、遺構の密度は高い。遺構の時期は出土遺物から、平安末~鎌倉初期とみられる。

褐色砂層の下層の薄褐色砂質土層からは土師器・須恵器の小片が激しく摩滅した状態でごく少量出土する。これらの遺物は標高50cm前後の砂丘基盤の海成砂層上面までみられる。

出土遺物の量は総量でパンケース5箱相当である。

2. 遺構・遺物

(1) 土坑

SK-01 (Fig.3 PL2-1)

調査北西側で検出した土坑。平面形は不整形で、全長2.6m以上、幅1.6mを測る。緩く湾曲する溝状部分と、西側の円形に掘られた土坑部分で構成される。溝部分は幅60~80cm、検出面からの深さ50~60cmで、断面形は逆台形を呈する。円形土坑部分は径80cm、遺構面からの深さは70cmで、床面は平坦である。円形土坑部分は掘立柱建物の柱穴の可能性もある。

出土遺物 須恵器・土師器の小片がビニール1袋分出土した。図示できるものはないが、小片の中には底面に糸切り痕がみられる土師器皿の小破片がある。

SK-02 (Fig.3 PL2-2・3)

調査区中央部で確認された土坑。平面形は円形に近い隅丸方形である。規模は南北2.1m東西2.2m、遺構面からの深さは80cmである。壁面の傾斜は緩く、一部は丸みをもつ碗形を呈する。床面西側は一段深くなる。検出面付近に石材が列状に並んでいるが、人為的に積まれた痕跡はない。別の遺構に伴う石材の可能性もある。

出土遺物 (Fig.5) 遺構内からは須恵器・土師器・陶器の破片が出土した。1・2は土師器皿。1は口径7.6cmで、底部は回転糸切り。2は口径10.0cmでごく浅い。底部は摩耗著しく、調整不明。3は擂鉢の口縁部。外面上方のみ薄く釉が掛かり、胎土は純い赤褐色を呈する。内面に擂目がある。

SK-03 (Fig.3 PL3-1)

調査区北側で検出された略楕円形の土坑で、SK-01に切られる。全長2.2m以上、幅1.9m、遺構面からの深さ70cmを測る。断面形は碗形を呈し、床面は不整形を呈し、平坦で、浅いピットが2基確認できた。

出土遺物 (Fig.5) 遺構内からは土師器・陶磁器破片が出土した。4は土師器坏。口径13.2cm、器高

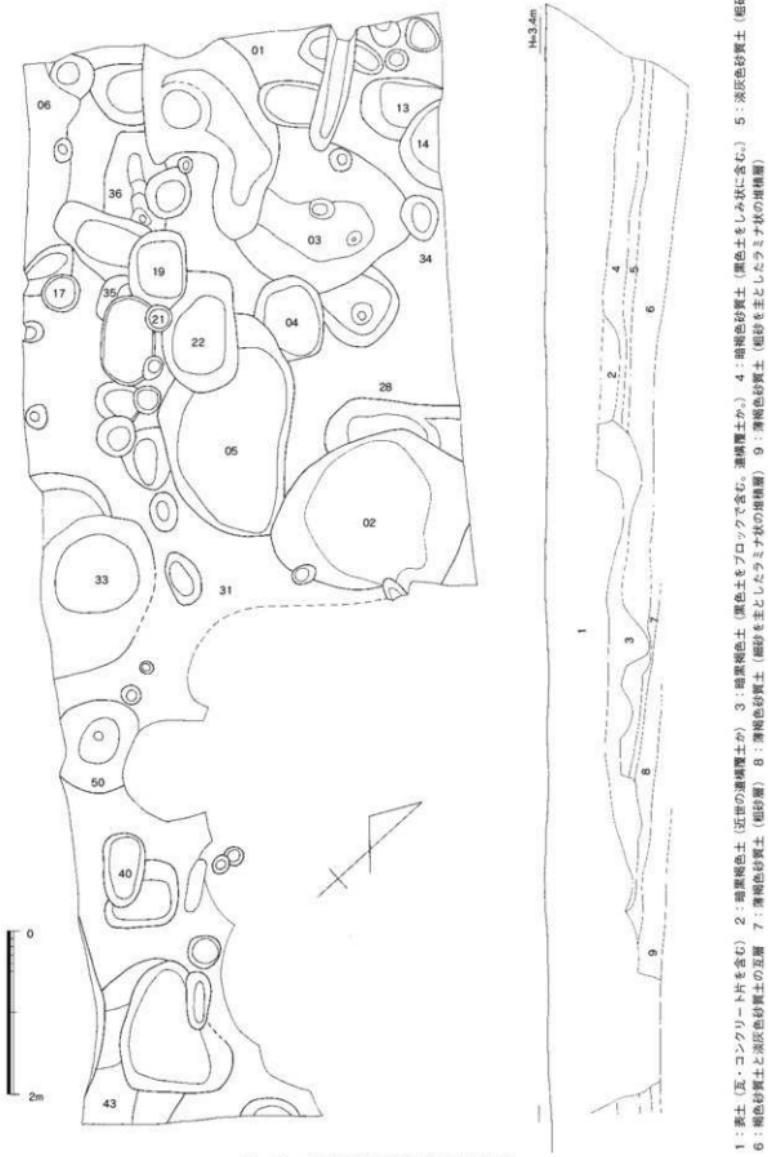


Fig. 2 第43次調査区全体図 (1/60)

2.4cm、底径9.6cmで底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。5は白磁碗の底部破片。見込みは円形に釉を剥ぎ、砂目の砂が付着する。外面の底部付近は露胎。釉色は灰白色で氷裂がみられる。

SK-04 (Fig.3)

調査区北側で検出した小型の土坑。全長1.0m、幅85cmの小判形で、断面形は箱形を呈し、床面は平坦である。遺構の主軸方向は砂丘の方向に直交する。SK-13、SK-19、SK-22等の小型の土坑と形状、大きさ、主軸方向などが一致し、同時期の同種類の遺構である可能性が高い。

出土遺物 遺構内から出土した遺物は土師器、白磁の破片で、ビニール袋1袋分である。いずれも小片で、図示できるものはない。

SK-05 (Fig.3)

調査区中央部に位置する土坑で、SK-02とSK-22に切られ、SK-04を切る。平面形は不整梢円形で、全長2.7m、幅1.6m、深さ50cm。床面は平坦で北側がやや上がる。壁面はほぼ直に立ち上がり、北壁は緩く立ち上がる。

出土遺物 (Fig.5) 6は青磁碗。内外面とも施釉され、釉は灰色を呈し、透明で氷裂がある。底部は碁笥底で、底部は上げ底を呈する。内面見込みは段を持つ。7は盤の底部破片。上面にはオリーブ黄色の釉の上にオリーブ褐色で鉄絵を線描きする。外底面は露胎で、胎土は粗い。8は鍋。口縁部は内湾し、体部は鉢形を呈するとみられる。外面には全面にススが付着して黒色を呈する。胎土は明赤褐色。9は擂鉢。口縁端部は外側に開き、端部は面取りする。内面に6条の摺目が付く。10は陶器壺の底部。外面に粗いハケ目調整痕が残る。

SK-13 (Fig.3)

調査区北側で検出した遺構で、他の遺構に切られているため、正確な規模は不明。ただし、SK-04に形状、規模が近似する遺構とみられる。幅80cm、遺構面からの深さ40cmを計り、断面形は箱形を呈する。

出土遺物 (Fig.5) 遺構内からはビニール袋1袋分の土師器・陶磁器破片が出土している。11は土師器壺。体部と底部の境界は緩く曲がる。底部は回転糸切り。

SK-14 (Fig.4)

調査区北側で検出した遺構で、SK-13を切る。遺構北半部は調査区外に及ぶため、遺構の形状や規模は不明。遺構面からの深さは50cmで、SK-04他、小型の小判形土坑とほぼ同じ深さで、このような土坑に類する遺構の可能性が高い。

出土遺物 (Fig.5) 遺構内からの遺物出土量はビニール袋1袋相当である。12は土師器壺。口径12.6cm、底径8.8cm、器高3.1cm。底部は回転糸切りで、板状圧痕が残る。底部と体部の境界は明瞭に屈曲する。13は土師器鍋。口縁部は屈曲して短く内湾し、外面全体にススが付着する。

SK-19 (Fig.4 PL3-2)

調査区北側で検出した小型の土坑。全長95cm、幅70cmで、遺構面からの深さは20cmで他の遺構に比べて浅い。

出土遺物 (Fig.5) 14・15は土師器皿。14は口径14.0cmで、底部中央を欠くが回転糸切り痕が確認できる。15は口径16.2cmで、体部と底部の境界は緩く屈曲し、境界は不明瞭である。

SK-22 (Fig.4)

調査区北側で検出した小型の土坑で、SK-19に切られる。平面形は隅丸長方形で、全長1.5m、幅90cm、遺構面からの深さ60cmで、断面形は逆台形を呈し、底部は平坦面を呈する。

出土遺物 遺構内からの出土遺物は土師器、白磁、陶器破片など、ビニール袋1袋分が出土している。

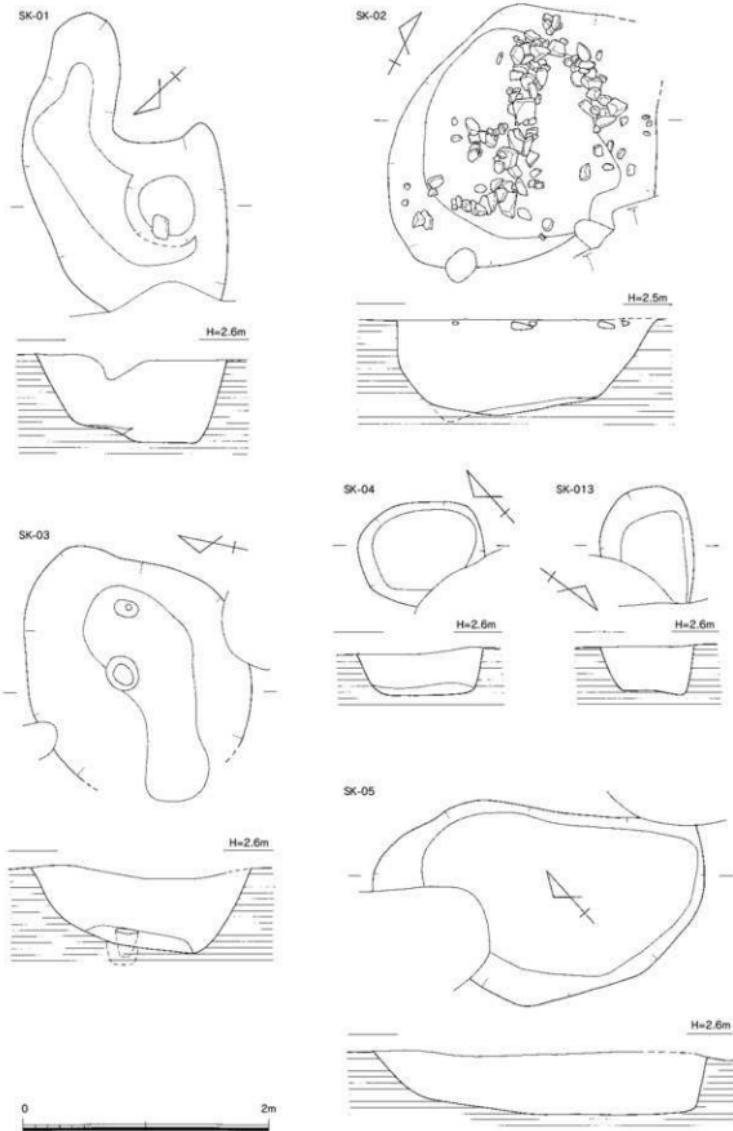


Fig. 3 遺構実測図 1 (1/40)

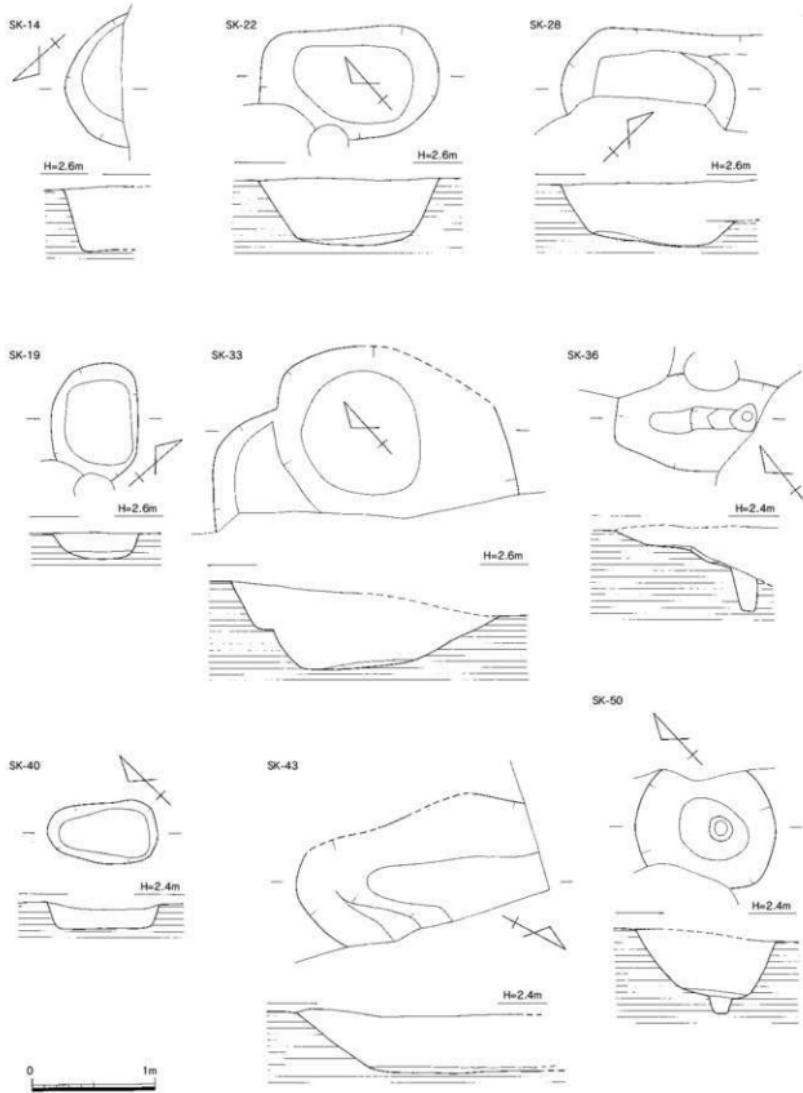


Fig. 4 遺構実測図 2 (1/40)

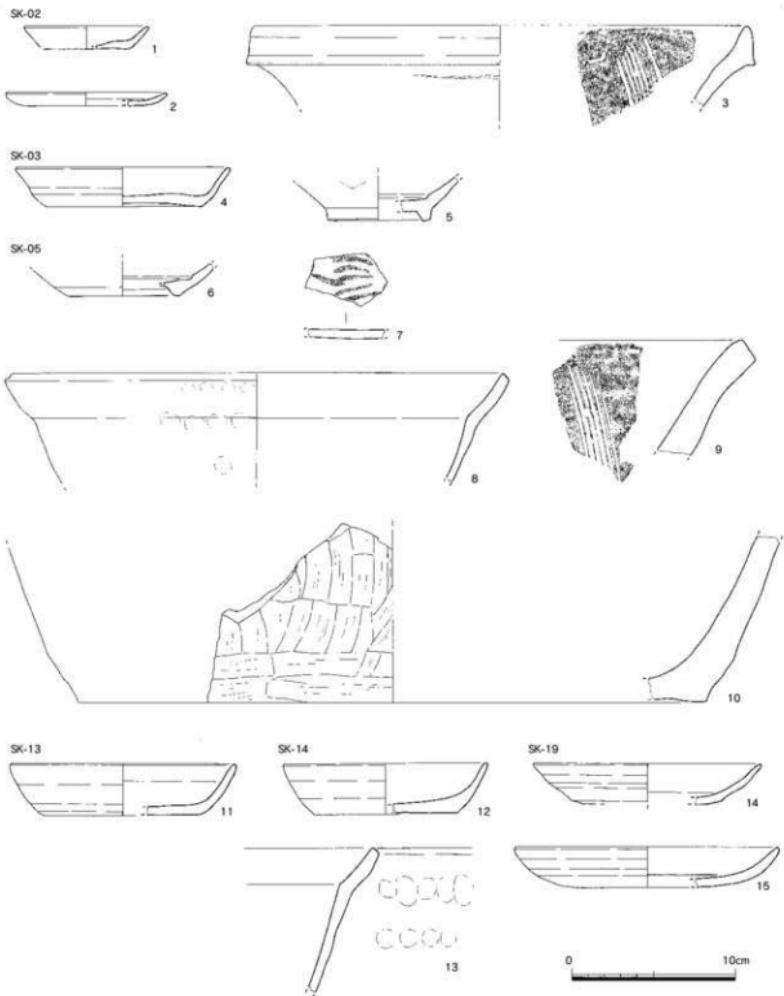


Fig. 5 遺物実測図 1 (1/3)

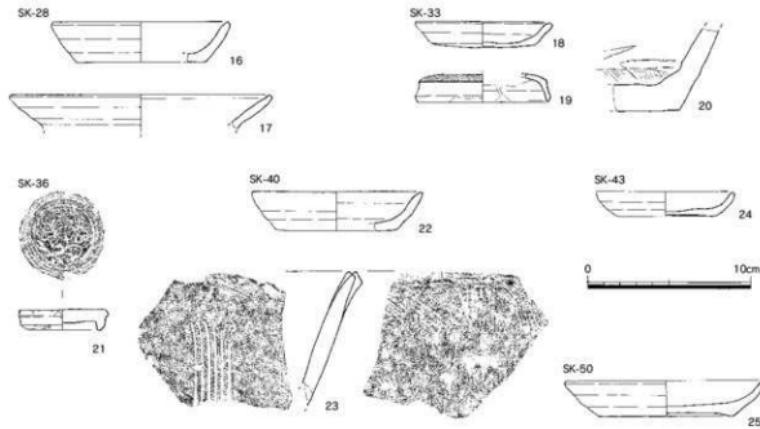


Fig. 6 遺物実測図 2 (1/3)

いずれも小片のため、図示できない。

SK-28 (Fig.4)

SK-02に切られている土坑で、遺構の北東側は調査区外に及び、遺構全体の形状は確定できないが、隅丸方形だった可能性がある。北西側の壁面は直線的で、床面の西側隅部は明瞭に屈曲する。床面は平坦で2段になっており、複数の遺構が切り合っている可能性が高い。

出土遺物 (Fig.6) 16は土師器皿。口径11.0cm、器高2.5cmで、底部は回転糸切り。17は土師器壺で、古墳時代の壺形土器の口縁部とみられる。口縁端部は丸く、わずかに上方に跳ね上がる。

SK-33 (Fig.4 PL3-3)

調査区南西側で検出した大型の土坑。2つの土坑が重複した状態で確認された。遺構東側は円形の土坑で、全長2.2m以上、床面は径1.1mで、井戸に近い形状だが井戸枠は確認できない。遺構の西側は隅丸方形の土坑とみられる。遺構面からの深さは40cmである。

出土遺物 (Fig.6) 18は土師器皿。口径8.4cm、器高1.6cmで、底部は摩耗が進むが回転糸切りとみられ、板状圧痕が残る。19は青磁盒子の蓋。釉は薄青灰色で透明感があり、氷裂がみられる。外面肩部分に陽刻で斜線文を施す。20は瓦質土器の鉢。内面は板状工具によるナデ、外面は丁寧にナデて仕上げている。

SK-36 (Fig.4 PL4-1) 調査区北西側で確認された遺構で、溝のような細長い形状を呈する。遺構の主軸は北西 - 南東に向き、全長1.2m、幅80cmで、床面が北西から南東にかけて緩く落ちていくのが特徴である。階段や通路として機能していた可能性がある。

出土遺物 (Fig.6) 21は青磁碗の底部を転用した瓦玉。内面見込みに蓮花文が陰刻され、スタンプによる刻印とみられる。高台内外面のみ施釉されており、釉色は灰白色～灰オリーブ色を呈する。

SK-40 (Fig.4) 調査区南側で検出された小型の土坑。平面形は略楕円形で、全長90cm、幅50cm、深さ30cmを測る。床面は平坦で、壁面は直に立ち上がる。

出土遺物 (Fig.6) 22は土師器皿。口径10.4cmで、底部は回転糸切り。23は擂鉢。口縁端部は面取りされ、内面は横方向ハケ目の上から6条の擂目が付けられる。外面は継方向の粗いハケ目を施す。

SK-43 (Fig.4 PL4-2)

調査区南隅で検出した土坑。遺構の南半部は調査区外に及ぶため、遺構の規模は不明だが、全長2m以上の細長い溝状の形態である見込みである。遺構西側壁面は2段掘り状を呈する。床面は平坦で、ほぼ水平である。

出土遺物 (Fig.6) 遺構内からは土師器・陶器破片が出土したが、図示できるものはほとんどない。24は土師器皿。口径8.4cmとやや小型で、底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。

SK-50 (Fig.5 PL4-3) 調査区南側で検出された円形の土坑。遺構の直径は1.2m、床面の径は50~60cmで、床面中央に径20cm、深さ10cmのピットが1基掘られている。遺構面から遺構床面までの深さは50cmを測る。

出土遺物 (Fig.6) 25は土師器壺。口径12.5cmで、底部はやや上げ底を呈し、回転糸切りで仕上げ、板状圧痕が残る。

(2) 溝状遺構

SD-11 (Fig.7)

調査区北端で検出した遺構で、少なくとも1.6mの長さを確認できる。溝幅40cm、深さ40cmで、断面形は逆台形を呈する。自然流路の可能性は低く、建物に伴う溝か敷地の区画溝とみられる。

出土遺物 (Fig.8) 27・28は土師器皿。27は完形で、口径7.0cm。底部は摩滅が著しく、調整不明。28は口径7.9cmで、体部が直線的に開く。底部は回転糸切りで、板状圧痕が残る。

(3) その他の遺物 (Fig.8・9)

26はSP-06出土の土師器皿。口径8.0cmで、体部は底部から緩く湾曲して開く。底部は回転ヘラ切りか。29はSP-21出土の土師器壺。底部破片で、高台は低い突帶状を呈する。30はSP-31出土の土師器皿。口径10.6cmで、口縁端部が太く、底部は回転ヘラ切り。31はSP-35出土の土師器皿。口径8.2cmで体部は底部から屈曲して直線的に開く。底部は回転糸切りで板状圧痕がみられる。

32はSP-17出土で、土師器壺を転用した瓦玉。径は約8.0cmで、周囲は丁寧に打ち欠かれている。内面見込みは一定方向のナデ痕が残る。

33はSP-25出土の白磁碗。高台は細く立ち上がり、体部は低く開いて、口縁部は軽く外反する。釉色は灰白色で光沢を持ち、高台側面まで掛かる。高台内に墨書きの痕跡が見られるが内容は不明。34はSK-38出土の白磁碗。高台は高く、釉は内面のみに認められ、灰白色で光沢無く、粗い。

35~38はSP-34出土。35~37は土師器皿で、いずれも底部は回転糸切り。38は白磁碗口縁部破片。

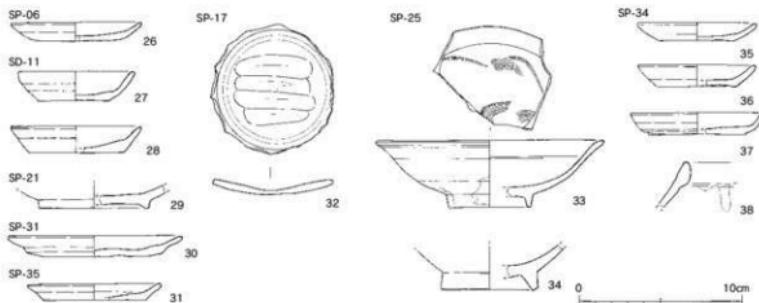


Fig. 8 遺物実測図 3 (1/3)

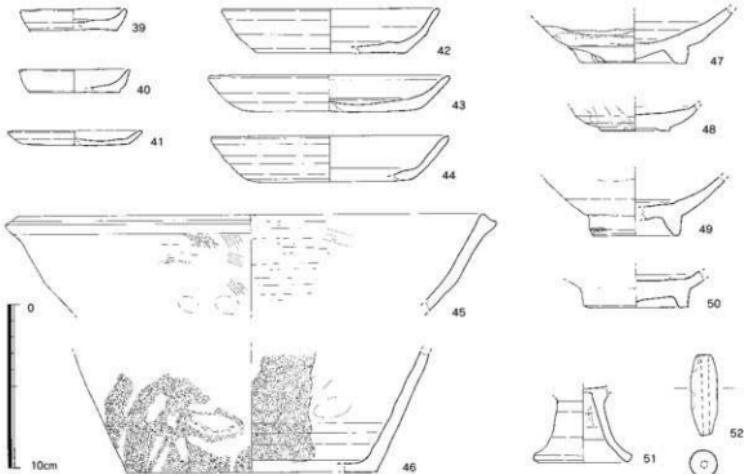


Fig. 9 遺物実測図 4 (1/3)

玉縁状で、釉色は灰白色を呈し、光沢を持ち、厚く掛かる。

Fig.9は遺構以外から出土した遺物。39・40は搅乱から出土した土師器皿で、時期が下る可能性が高い。底部は回転糸切り。41は2面上層包含層から出土した土師器皿で、底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。42は調査区内から出土した土師器坏で、内面に線状に煤痕があり、灯明皿とみられる。43・44は2面上層包含層から出土した土師器坏。底部は摩滅が進むが、回転ヘラ切りか。

45は土師器質の捏鉢。内面は横方向ハケ目を施す。46は陶器壺の底部。外面は黒褐色の鉄釉が掛かり、内面は灰～灰白色の釉が掛かる。

47は陶器鉢。高台の3ヶ所を削る。胎土は赤褐色で、外面に白色と黄色の釉が残り、内面は露胎。48は朝鮮青磁の碗。釉色は鈍黄褐色で、見込みに胎土目が付く。搅乱からの出土。49は白磁碗。灰白色の釉が外面上半と内面に掛かる。50は白磁碗底部。見込みは輪状に釉を剥ぎ、砂目が残る。釉色は灰白色。51は土師器高坏、内外面とも摩滅が進む。搅乱から出土。52は土錘で、調査区壁面から出土したもの。重量は14.3gを計る。

(4) 銭貨・金属製遺物

53はSK-03出土の銅錢。径2.4cmで、銘文不詳。54は調査区内で表採された銅錢破片で、「祥」字が確認できる。55は銅製品で、刀装具とみられる。表面は厚く鏽び付く。



Fig.10 遺物実測図 5 (1/3 · 1/2)



1 調査区西半全景（西から）



2 調査区東半全景（西から）



3 調査区西壁（東から）



1 SK-01 (西から)



2 SK-02 上面 (西から)



3 SK-02 (西から)



1 SK-03 (北から)



2 SK-19 (南から)



3 SK-33 (東から)



1 SK-36 (南から)



2 SK-43 (南から)



3 SK-50 (南から)

第3章 第77次調査の記録

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市東区箱崎1丁目2708-1において、土地所有者様より共同住宅建設計画の策定にあたって、平成27年1月29日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）になされたことにより始まる。申請面積は740m²、受付番号は26-2-944である。

申請地は箱崎遺跡の中央部に位置しており、埋蔵文化財審査課は照会を受けて平成27年5月11日に確認調査を行った。その結果、地表面下約160cmで遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される394m²については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は平成27年8月20日に着手、平成28年2月10日に終了した。資料整理および報告書作成については平成29年度に行うこととなった。

2. 調査組織

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査：平成27年度 整理報告：平成29年度）

調査総括	文化財部埋蔵文化財調査課（現：埋蔵文化財課）	課長	常松幹雄
庶務	埋蔵文化財審査課（現：埋蔵文化財課）	調査第1係長	吉武 学
		管理係長	大塚紀宜（27年度）
		管理係	川村啓子（27年度）
	文化財保護課	管理調整係	松原加奈枝（29年度）
事前審査	埋蔵文化財調査課（現：埋蔵文化財課）	事前審査係長	佐藤一郎（27年度）
		主任文化財主事	本田浩二郎（29年度）
		文化財主事	池田祐司
発掘調査	埋蔵文化財調査課（現：埋蔵文化財課）	調査第1係	板倉有大（27年度）
		文化財主事	清金良太（29年度）
			清金良太（27年度）
			松嶽友理

発掘作業 宮崎正 廣瀬公則 吉田哲夫 柴田秀人 河原明子

岩佐克行 節政善憲 久保和美 瓜生健（福岡大学）

渡辺清嗣

吉岡田鶴子

山本千加子

進藤正長

整理作業 大石加代子

西村加奈

II. 調査の記録

1. 調査の概要

本章で報告する箱崎遺跡第77次調査区は、東区箱崎1丁目2708-1に所在する。本遺跡の中央部や北寄りに位置し、南北方向に長く延びる砂丘の尾根線付近に立地する。本調査地の南側では第63次、北側では第73次調査が行われている。

平成27年8月20日に機材の搬入を行い、発掘調査を開始した。排土置場の関係で調査区を四分割し、南東側のI区から調査に取り掛かった。8月24日～9月29日にI区、9月30日～11月26日にII区、11月27日～12月24日にIII区、12月25日～平成28年1月29日にIV区の調査を行った。2月1・2日で埋め戻しを行い、9日まで土器の洗浄作業を行った。10日に機材等を撤収し、調査を終了した。

Fig. 4に調査区南壁の土層図を示した。調査前の標高は約4.5mで、地表面より100～120cmは現代の盛土である。その下に細かな土器片を含んだ黒褐色砂質土（Fig.4-10層）が30～80cmほど堆積していた。黒褐色砂質土の面では遺構を把握できず、その下の黒褐色砂質土と黄褐色砂が混じった黄黒褐色砂質土で遺構を確認した。この土層の上面を第1面に設定し、黄褐色砂の地山上面を第2面の検出面とした。第1面の標高が約3.0m、第2面の標高が約2.8mである。検出した主な遺構は中世の建物跡2棟、井戸、溝、土坑などである。主な遺物は12世紀～13世紀を中心とする土師器、輸入陶磁器、土錘、滑石製品、銅錢、鉄製品などで、コンテナケース79箱分が出土した。

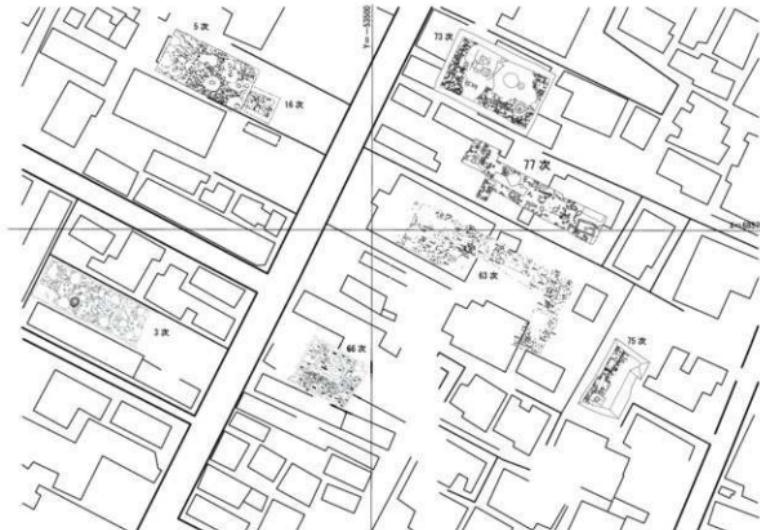


Fig. 1 第77次調査地点位置図 (1 / 1,000)

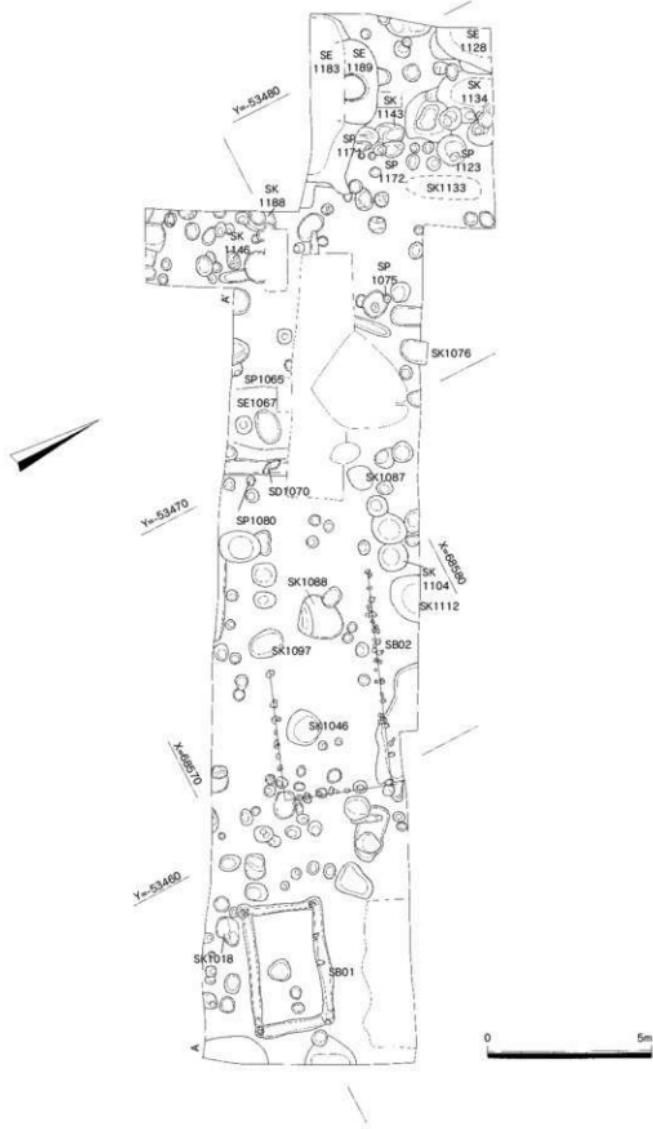


Fig. 2 第77次調査区第1面遺構配置図（1／150）

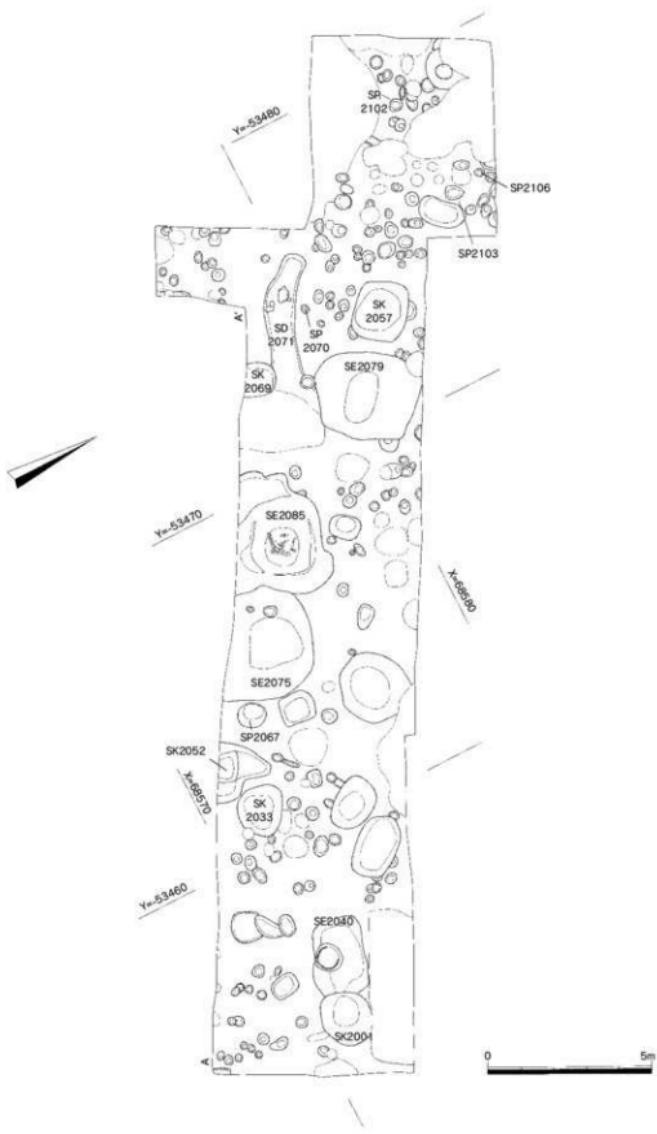


Fig. 3 第77次調査区第2面遺構配置図（1／150）

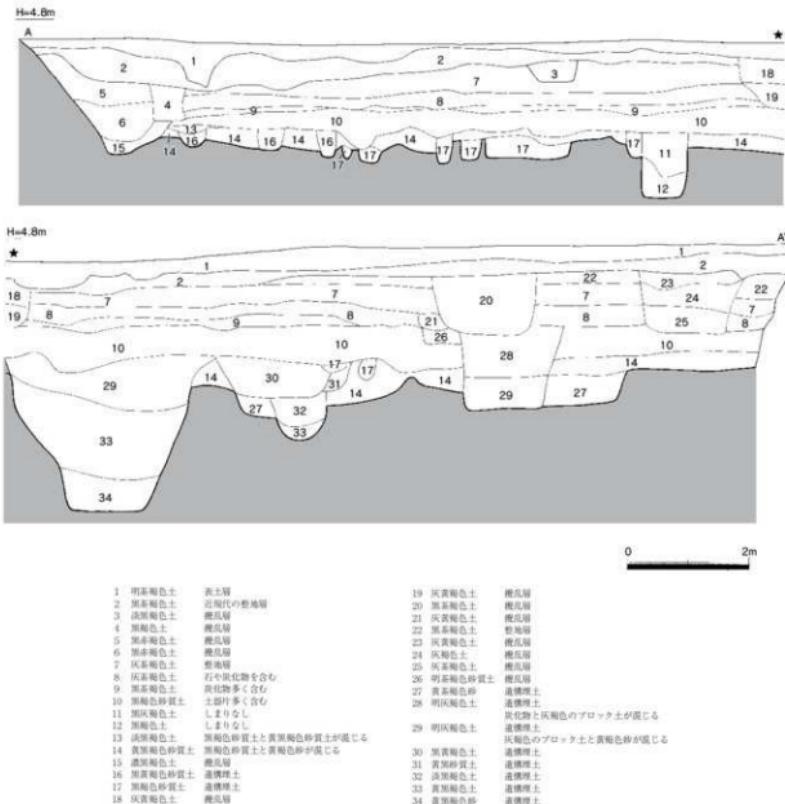


Fig. 4 第77次調査区I・II区南壁土層断面図 (1/80)

2. 遺構と遺物

(1) 建物跡 (SB)

I区とII区において建物の基礎と考えられる遺構が2基検出された。調査時には検出順に遺構番号を付していくため、SB01に関しては同じ建物の基礎と考えられる遺構をまとめて報告する。

SB01 (Fig.5・7, PL5-1)

調査区東側で検出された建物跡である。検出時の遺構番号はSD1002・SD1005・SD1006・SD1047・SP1015・SP1057で、これらをまとめてSB01として報告する。検出時の標高は約3.0mを測り、主軸はN-69°Wをとる。幅30~40cmの溝状遺構が南北長約2.4m×東西長4.0mの長方形に巡っている。深さは約40~60cmを測り、埋土の主体は上層が淡黒褐色砂、下層が暗茶褐色砂である。標高2.8~2.9mでは数か所で石が検出されており、礎石の可能性が考えられる。遺構の平面プランや形態から、布掘の柱穴列とみられ、建物の規模などから蔵などの基礎と推定される。礎石と考えられる石

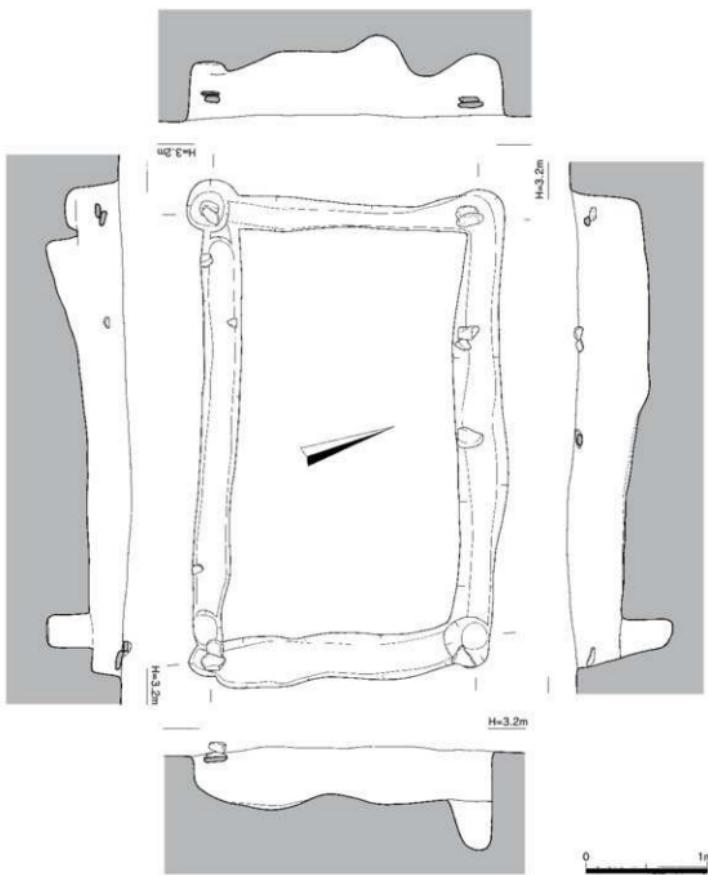


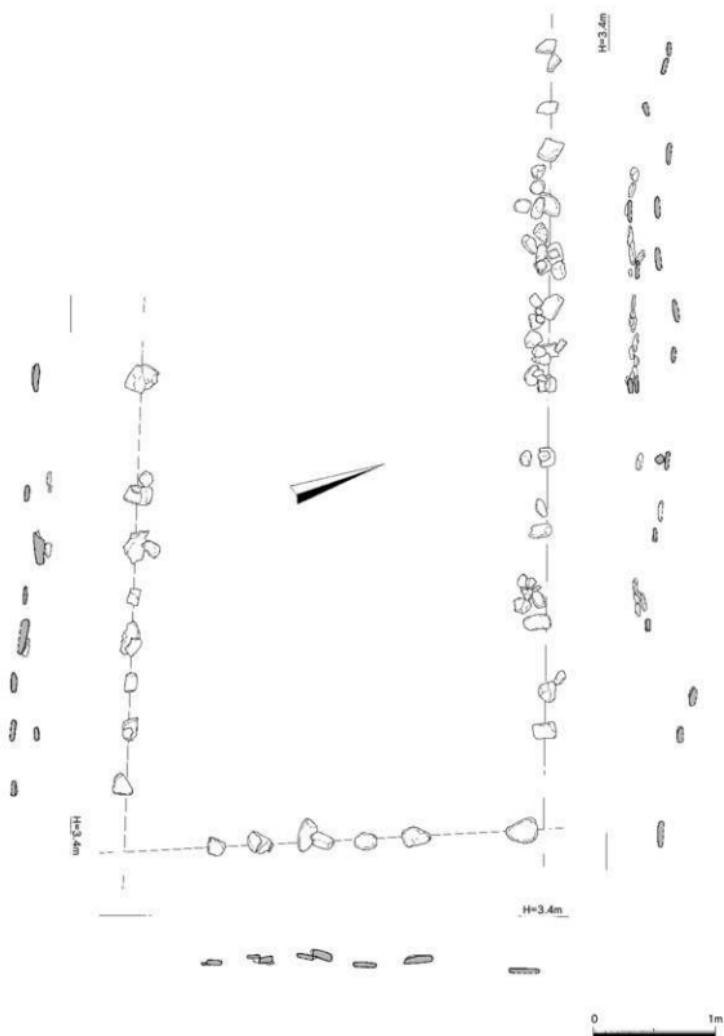
Fig. 5 SB01 実測図 (1 / 40)

が底面から離れて検出されていることから建て直しがあった可能性も想定される。出土遺物の年代から12世紀前半と推定される。

出土遺物 (Fig. 7) 1～3は土師器の小皿である。1は口径8.8cm、器高1.1cm、2は口径9.2cm、器高1.0cmを測る。1・2の底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。3は口径9.3cm、器高1.3cmを測る。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が認められる。4は土師器の壊である。復元口径17.2cmで底部には回転糸切りが認められる。5は白磁碗IV類の底部である。

SB02 (Fig. 6・7, PL5-2・3)

調査区中央よりやや東側で検出された建物跡である。検出時の標高は約3.0～3.2mを測る。主軸は



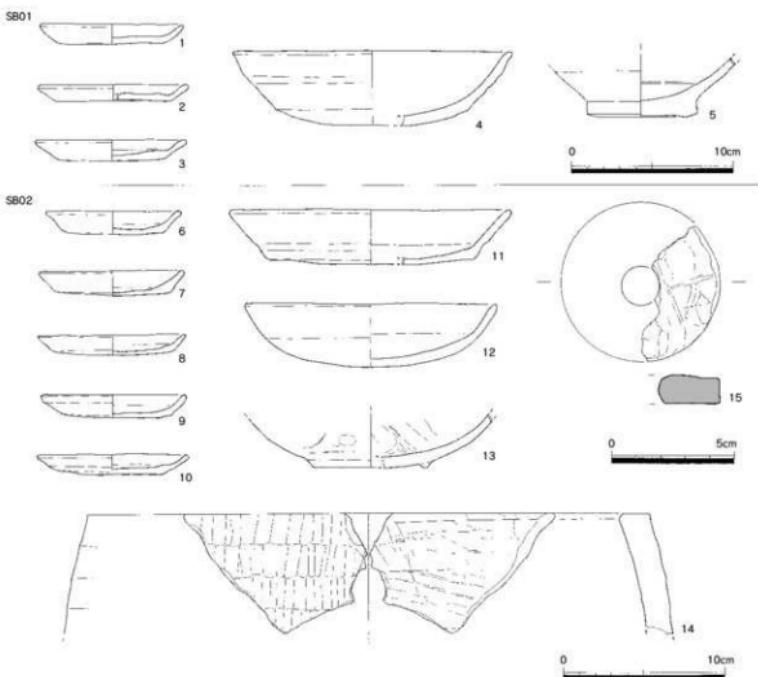


Fig. 7 SB01・02出土遺物実測図 (1/3・1/2)

N-70°Wをとる。建物の礎石と考えられる列石が三方で検出された。列石には10~20cm大の石が用いられ、残存状態が良いところでは少なくとも2段以上の重なりを確認することができた。西側と南西側では列石を検出できていないが、北側で長さ4.6m、南側は長さ4.0m、東側は長さ3.4mを測り、建物の規模は少なくとも東西長6.4m×南北長3.4mであったと推定される。出土遺物の年代から11世紀後半~12世紀前半と考えられる。

SB01とは建物の規模が異なるものの、建物の主軸が同じであり、隣接して並んでいることから、ほぼ同時期である可能性が高い。SB01と同様に蔵などの建物の跡と推定される。

出土遺物 (Fig. 7) 6~10は土師器の小皿である。6~8の底部は回転ヘラ切りで7・8には板状圧痕が認められる。9は完形で口径8.9cm、器高14cmを測る。9・10の底部は回転糸切りでともに板状圧痕が認められる。11は土師器の皿で、底部には回転糸切りと板状圧痕がみられる。12は土師器の壺である。口径15.3cm、器高3.3cmを測る。13は瓦器椀で、復元高台径は6.8cmを測る。器面にはヘラミガキがみられる。14は滑石製石鍋で、外面には煤が付着する。口縁部下に鍔が認められないことから、把手が付くタイプとみられる。15は不明滑石製品である。復元直径は6.4cm、復元孔径は5.5cmを測る。滑石製石鍋の再加工品とみられ、円盤状を呈する。

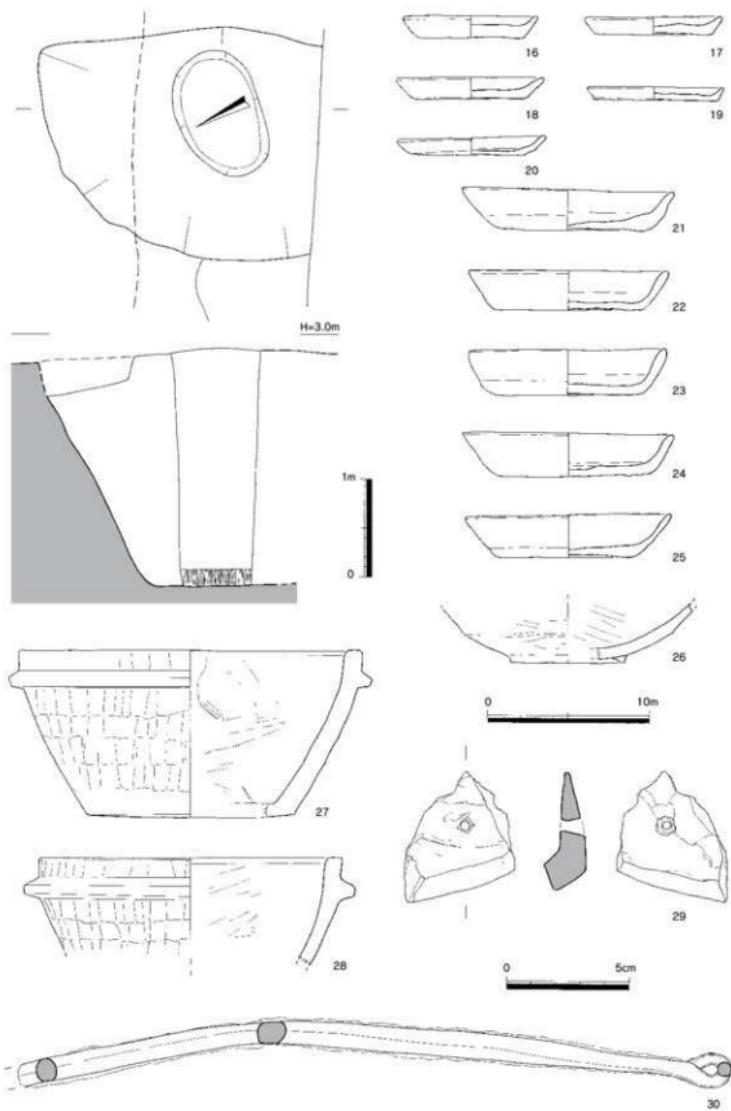


Fig. 8 SE1067 実測図 (1/50) および出土遺物実測図 (1/3・1/2)

(2) 井戸 (SE)

SE1067 (Fig.8 PL6-1)

調査区中央よりやや西側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約2.9mを測る。南側は調査区外へと続き、北側の上端は攪乱によって一部削平されている。掘方の平面プランは東西長2.4m×南北長2.9m以上の楕円形を呈すると推定される。深さは約2.5mを測り、標高0.5m付近で湧水した。深さ約2.25mで井筒を検出した。井筒には幅約10cmの板材を組み合わせた径75cmの桶が用いられていた。出土遺物の年代から13世紀前半と考えられる。

出土遺物 (Fig.8) 16~20は土師器の小皿である。口径8.2~9.1cm、器高0.8~1.3cmを測る。いずれも底部は回転糸切りであるが、18には板状圧痕も認められる。21~25は土師器の皿である。21は完形であるが、口縁部の歪みが大きく、口径11.8~13.0cm、器高2.6cmを測る。21~25はいずれも底部が回転糸切りで、21~24には板状圧痕がみられる。26は瓦器碗の底部である。色調は外面が灰色、内面が灰白色を呈する。内外面ともにヘラミガキ、外面底部には回転ナデが施される。27・28は滑石製の石鍋である。27は復元口径21.0cm、器高10.2cm、28は口径18.5cmを測り、外面には煤が付着している。27では口縁部直下に直径約0.5cmの取手穴が穿たれている。29は不明石製品である。滑石製石鍋の底部を用いた再加工品とみられ、直径0.3cmの孔が認められる。長さ5.4cm、幅4.5cm、厚さ1.7cmを測る。30は不明鉄製品である。やや湾曲した棒状を呈し、一方の端部を環状に曲げている。残存長29.1cm、幅1.1cm、厚さ0.6~1.2cmを測る。

SE1128 (Fig.9)

調査区の北西端に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約2.7mを測る。北西側と北東側がいずれも調査区外へと続いており、本調査区内では1/4以下の検出にとどまった。検出できた平面の長さは東西長1.2m、南北長1.65mを測る。検出面から約1.3m掘り下げた段階で井筒とみられる黒褐色土の堆積を確認したが、安全対策上これ以上掘削を行うことは出来なかった。井戸の掘方上部のみの掘削となつたため、井戸の時期については不明であるが、上層の遺物には近世の陶器も含まれている。

出土遺物 (Fig.9) 31は同安窯系の青磁皿である。全面施釉された後に底部外面の釉が搔き取られている。内面には櫛点描文がみられる。32・33は陶器の碗である。32は全面に黄釉が施釉されている。33は褐釉を施釉された後に白泥がかけられ、内面には筆ナデが施されている。

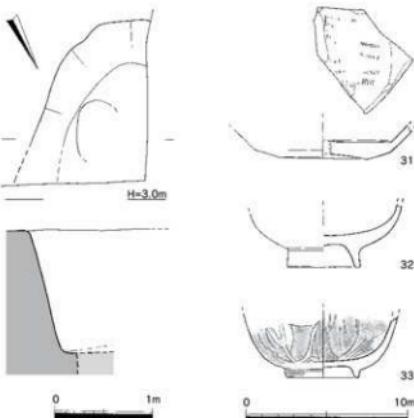


Fig. 9 SE1128 実測図 (1/50) および出土遺物実測図 (1/3)

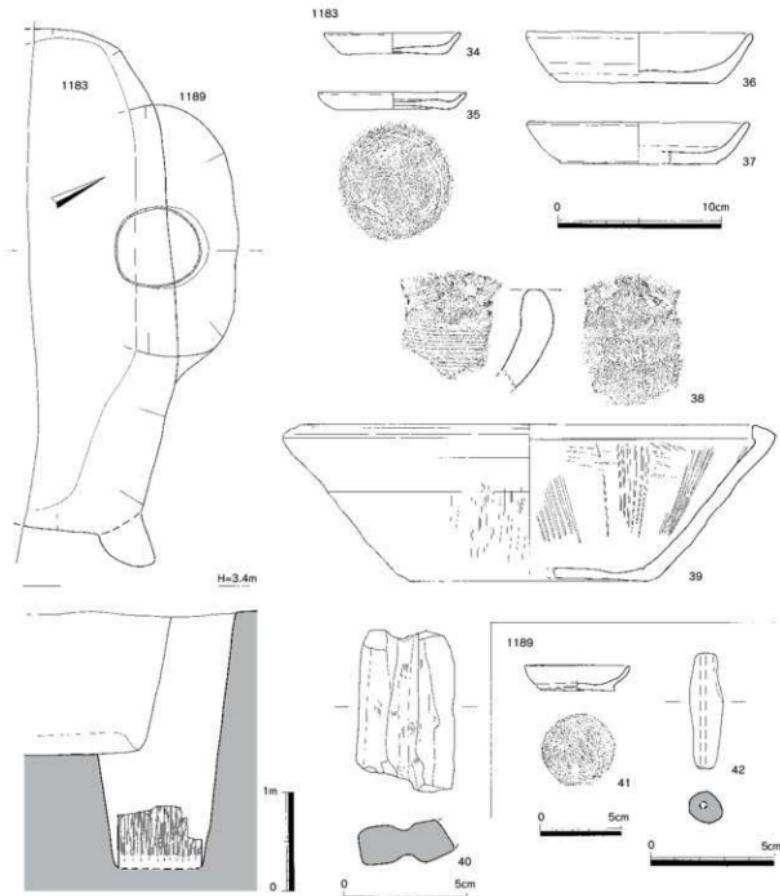


Fig.10 SE1183・1189 実測図 (1/50) および出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SE1183・1189 (Fig.10 PL6-2)

調査区の北西側に位置する。井戸が2基切り合っているため、ここでまとめて報告する。SE1183・SE1189はいずれも第1面で検出され、検出面の標高は約3.1mを測る。SE1183では南側の半分以上が調査区外へと続いているため、平面プランは不明である。深さ約1.5mで地山に達し、調査区内では井筒を検出できなかった。井筒は南側の調査区外に位置するとみられ、調査区内で検出された部分は井戸の掘方上部のテラス面である可能性が想定される。

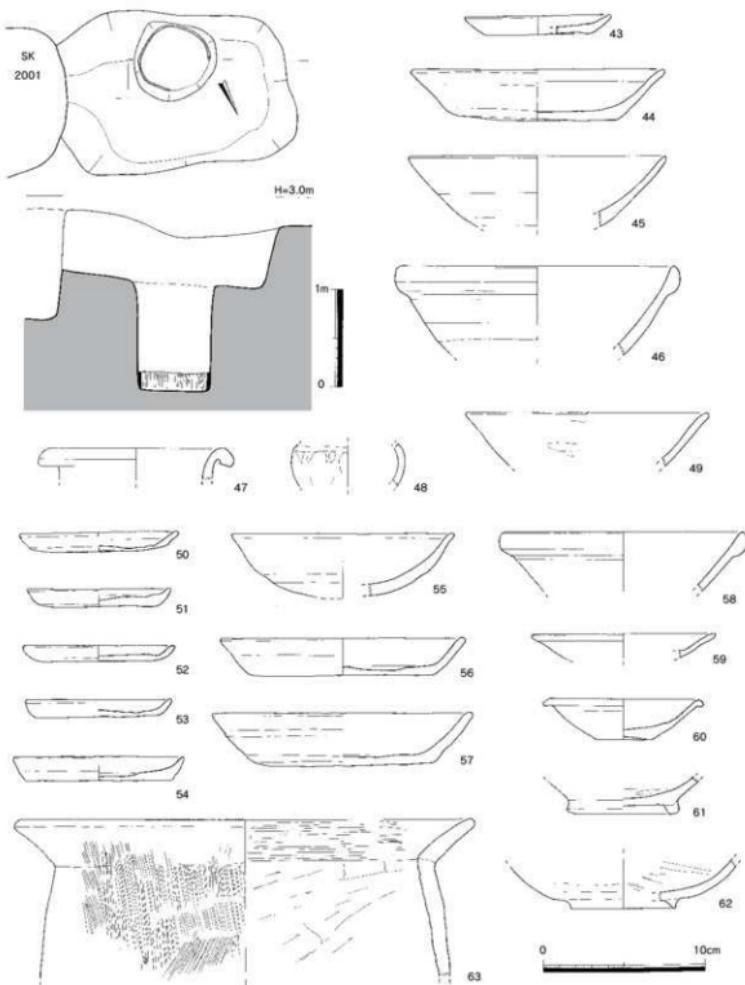


Fig.11 SE2040 実測図（1／50）および出土遺物実測図（1／3）

SE1189はSE1183に切られ、南側を大きく削平されている。東西長約2.5m、南北長1.25mを測り、平面プランは楕円形を呈すると推定される。深さ約2.0mで井筒を検出した。井筒には幅約8cmの板材を組み合わせた径85cmの桶が用いられていた。最底面は標高約0.5mで湧水し、完掘できなかった。出土遺物の年代から、SE1183の時期は14世紀後半、SE1189の時期は14世紀中頃と考えられる。

出土遺物 (Fig.10) 34~40はSE1183、41・42はSE1189で出土した。34・35は土師器の小皿で、口径8.2~8.9cm、器高1.1~1.3cmを測る。いずれも底部は回転糸切りで34には板状圧痕がみられる。36・37は土師器の皿である。口径13.4~13.6cm、器高2.5~3.0cmを測り、いずれも底部は回転糸切りである。37は灯明皿として使用していた可能性がある。38は瓦質土器の浅鉢である。口縁端部は丸みを持ち、体部外面には花文のスタンプが押捺されている。39は瓦質の擂鉢である。復元口径29.8cm、器高9.5cmを測る。40は石錘である。滑石製石鍋の再加工品とみられ、長さ6.6cm、最大幅4.0cm、厚さ1.9cm、重量69.11gを測る。41は土師器の小皿である。完形品で口径6.4cm、器高1.5cmを測り、底部は回転糸切りである。42は土錘である。完形品で長さ4.7cm、最大径1.4cm、孔径0.2cm、重量6.94gを測る。

SE2040 (Fig.11 PL6-3)

調査区東側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約2.8mを測る。東側はSK2001に切られる。東西長2.25m以上×南北長1.7mを測り、平面プランは楕円形を呈する。標高約2.1mで段を有し、掘方中央よりやや南側で井筒が検出された。井筒には板材を組み合わせた径70cmの桶が用いられていた。最底面の標高は約1.0mを測り、最底面付近で湧水した。出土遺物の年代から12世紀中頃から12世紀後半の井戸と推定される。

出土遺物 (Fig.11) 43~49は掘方、50~63は井筒で出土した。43は土師器の小皿である。口径9.0cm、器高12cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が認められる。44は土師器の皿である。口径15.6cm、器高3.1cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が認められる。45・46は白磁の椀で、45はII類、46はIV類にあたる。47は白磁四耳壺の口縁、48は白磁の合子である。49は瓦器の椀である。体部外面にヘラミガキが認められる。

50~54は土師器の小皿である。口径8.8~10.4cm、器高1.0~1.5cmを測る。50・51の底部は回転ヘラ切り、52~54の底部は回転糸切りで、いずれも板状圧痕の痕跡が認められる。55は土師器の壺である。口径13.6cm、器高4.0cmと推定される。56・57は土師器の皿である。口径15.0~16.0cm、器高2.3~3.2cmを測る。いずれも底部は回転糸切りで板状圧痕の痕跡がみられる。58は白磁の椀でIV類にあたる。59・60は白磁の皿である。59は復元口径11.2cm、60は復元口径9.8cm、器高2.4cmを測る。60は白磁皿のIV類、59は口縁部片のため不明確であるが、VI類とみられる。61・62は瓦器椀である。復元高台径は61が6.8cm、62が6.4cmを測る。63は土師器の壺である。復元口径28.2cm、残存高9.5cmを測る。胎土には白色粒を多く含み、器面の色調はにぶい橙色を呈する。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリがみられる。63は8世紀後半に推定され、混ざり込みと考えられる。

SE2075 (Fig.12)

調査区の中央南側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約2.5mを測る。南側は調査区外へと続き、西側はSE2085を切っている。東西長約3.5m、南北長2.75m以上を測り、平面プランは楕円形と推定される。埋土の主体は上層が黒茶褐色土、下層が黄黒砂質土である。深さ約1.85mを測り、標高約0.6mの最底面付近で湧水した。底面は楕円形を呈し、最底面は平坦である。井筒は検出できていない。出土遺物の年代から13世紀前半と推定される。

出土遺物 (Fig.12) 64~67は土師器の小皿である。口径8.4~10.5cm、器高1.0~1.5cmを測る。いずれも底部は回転糸切りで、67では板状圧痕が認められる。68~70は土師器の皿である。口径14.3~17.2cm、器高2.4~3.0cmを測る。69・70ではともに底部に回転糸切りと板状圧痕が認められる。71~73は瓦器椀である。71は口径17.4cmを測り、器面の色調は灰色を呈する。内外面ともにヘラミガキがみられる。72は高台径7.2cmを測る。器面の色調は灰白色を呈し、内面にはヘラミガキが施される。73は復元高台径5.8cmを測る。74は須恵器の坏蓋で、復元口径11.4cmを測る。内外面ともに回転ナデが施される。器面の色調は灰色を呈する。75は擂鉢の口縁部で復元口径19.8cmを測る。内外面ともに回転ナデが施される。器面の色調は明青灰色を呈する。74は6世紀末~7世紀初めに推定され、混ざり込みと考えられる。

SE2079 (Fig.13)

調査区の中央よりやや西側に位置する。

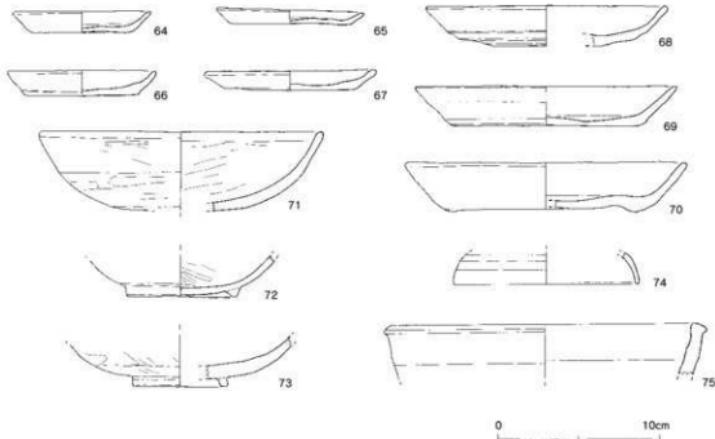
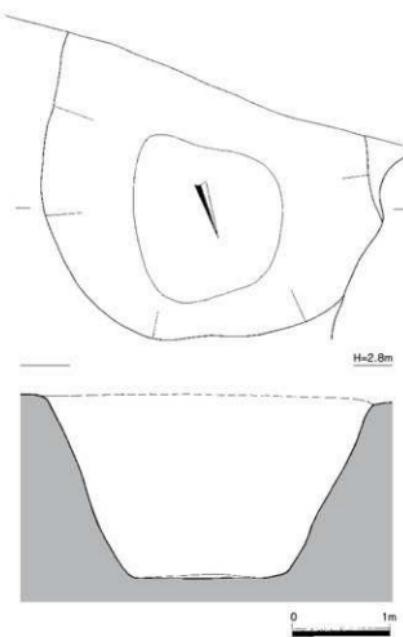


Fig.12 SE2075 実測図 (1 / 50) および出土遺物実測図 (1 / 3)

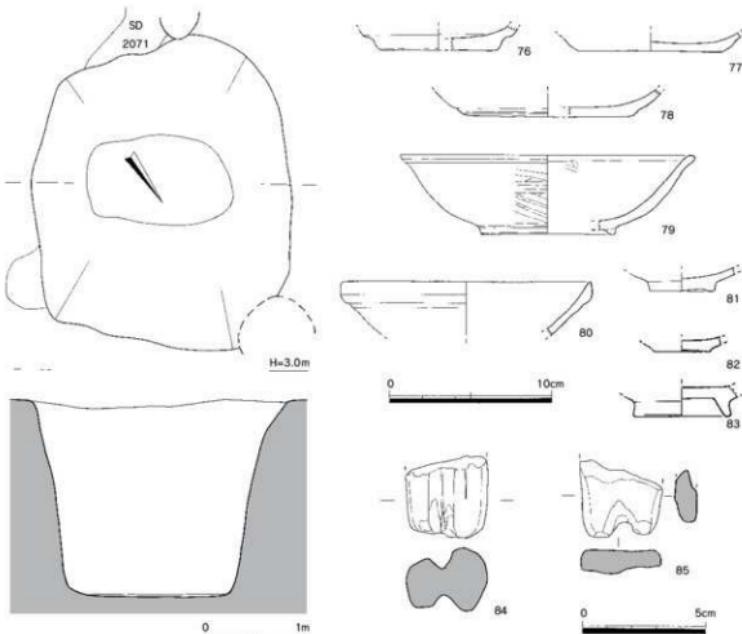


Fig.13 SE2079 実測図 (1/50) および出土物実測図 (1/3・1/2)

第2面で検出され、検出面の標高は約2.7mを測る。南側はSD2071を切っている。東西長約2.75m、南北長3.2mを測り、平面プランは楕円形を呈する。深さは約2.0mを測り、標高約0.7mの底面付近で湧水した。底面は楕円形を呈し、最底面は平坦である。井筒は検出できていない。遺構の切り合いと出土遺物の年代から12世紀中頃～後半と推定される。

出土遺物 (Fig.13)

76～78は土師皿の底部片である。76は底部径7.2cmを測り、体部中位に屈曲が認められる。底部には回転ヘラ切りがみられる。77は底部径8.9cmを測り、底部には回転糸切りと板状圧痕が認められる。78は底部径10.2cmを測り、底部には回転糸切りの痕跡がみられる。79は瓦器椀である。口径13.0cm、器高4.8cm、高台径8.2cmを測る。器面の色調は内面が灰色、外面が灰白色を呈する。内外面ともにヘラミガキがみられ、口縁端部と高台ではヨコナデが認められる。80・81は白磁椀である。80は厚い玉縁状の口縁で、口径は15.1cmを測る。白磁椀のIV類にあたる。81は高台径4.0cmで、高台は露胎、それ以外には施釉がみられる。82は白磁の皿である。底部径3.4cmを測る。底部外面には施釉されていない。83は土師器の椀である。高台径6.0cm、高台高0.9cmを測る。器面の色調は内外面ともに明赤褐色を呈し、内面にはナデ、高台にはヨコナデ、底部外面には回転ナデの痕跡がみられる。84は滑石製の石錘である。残存長3.3cm、最大幅3.3cm、最大厚2.6cmを測る。欠損面以外は全面が研磨されており、工具痕とみられる沈線が認められる。85は滑石製の石製品で、石錘の可能性がある。残存長3.1cm、最大幅3.3cmを測る。

SE2085 (Fig.14・15 PL7-1)

調査区中央部南側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約2.6mを測る。南側は調査区外へと続き、東側はSE2075に切られている。平面プランは東西長最大3.7m、南北長2.95m以上の不定形を呈する。西側には深さ約0.35mでテラス状の段差が認められ、深さ約1.0mでは西側以外に段が巡っている。深さは約1.9mを測り、標高約0.6mの底面付近で湧水した。底面は東西長約1.0m×南北長約1.2mの梢円形を呈し、最底面は平坦である。標高1.0m付近で木材がまとまって検出された。井戸枠に用いられていた板材とみられ、最も長い板材は約70cmを測る。木材の出土状況から板材は本来、方形に組まれていたと考えられる。曲物とみられる木材もみられることから、方形の井戸枠を据え、その中央に曲物が据えられていたと考えられる。出土遺物の年代から11世紀後半～12世紀前半と推定される。

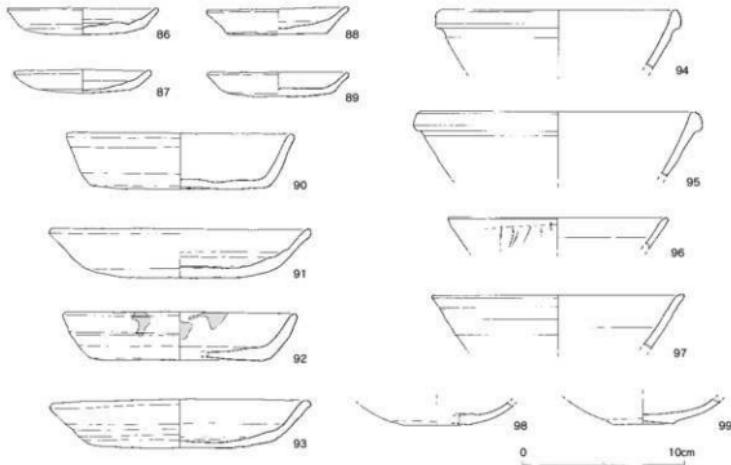
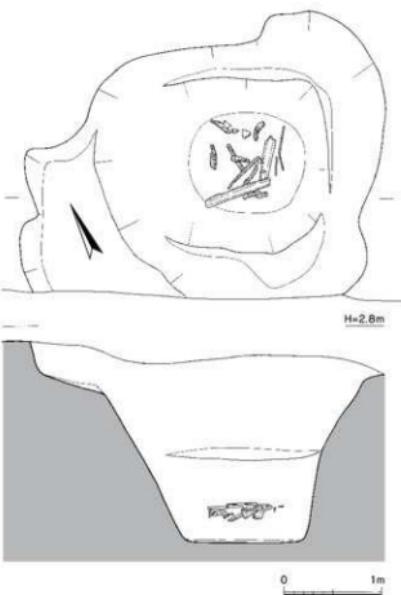


Fig.14 SE2085 実測図（1／50）および出土遺物実測図①（1／3）

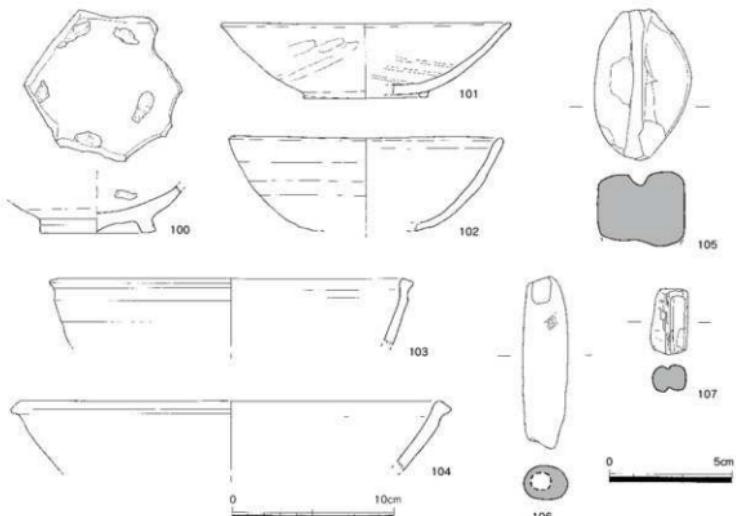


Fig.15 SE2085 出土遺物実測図② (1/3・1/2)

出土遺物 (Fig.14・15)

86～89は土師器の小皿である。口径8.4～9.2cm、器高1.2～1.6cmを測る。86・87の底部は回転ヘラ切り、88・89は回転糸切りで、いずれも板状圧痕がみられる。90～93は土師器の皿である。口径14.0～16.4cm、器高2.4～3.0cmを測る。90・91の底部は回転ヘラ切り、92・93の底部は回転糸切りである。92の口縁部には油炎がみられ、灯明皿として使用されたと考えられる。94～97は白磁の椀である。胎土はいずれも灰白色を呈し、96以外は微細な黒斑が混じる。97の軸は淡青灰色を呈し、それ以外は灰白色的軸が施されている。94・95は玉縁状の口縁を有し、白磁椀のⅣ類にあたる。96は外面に縱横目文が施されている。白磁椀のV類にあたる。98・99は白磁皿である。いずれも底部のみが残存しているため不明確であるが、98が白磁皿のⅤ類、99がⅥ類にあたると考えられる。100は青磁の椀で高台径7.1cmを測る。胎土には白色粒を含み、色調は灰色を呈する。内面見込みに目跡があることから、重ね焼きでつくられた量産品とみられ、粗雑である。初期高麗青磁の椀とみられる。101・102は瓦器椀である。101は口径17.8cm、器高4.6cm、102は口径16.8cmを測る。101では内外面にヘラミガキが認められる。103・104は鉢である。103は口径22.2cm、104は24.0cmを測る。いずれも土師質で口縁部外面は灰赤色、その他はにぶい橙色を呈する。内外面に回転ナデの痕跡は認められる。105・106は土鍤である。105は表裏ともに溝を有し、長さ6.2cm、最大幅4.0cm、残存厚3.0cmを測る。106は管状を呈し、長さ7.0cm、最大幅1.9cm、孔径約0.8cmを測る。107は滑石製の石鍤である。井戸枠付近で出土した。丁寧に研磨され、全体的に丸みを帯びている。長さ2.2cm、幅1.1cm、最大厚1.1cmと小型である。

(3) 土坑 (SK)

SK1018 (Fig.16)

調査区南東側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.0mを測る。東西長約1.0m、南北長約0.56mを測り、平面プランは楕円形を呈する。深さは東側で約0.4m、西側で約0.72mを測り、西側の底面は30cmほど下がっている。別の遺構の切り合いの可能性もあったが、埋土が同じであったため、同一の遺構とした。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物の年代から12世紀半ば～13世紀前半と考えられる。

出土遺物 (Fig.16) 108・109は土師器の小皿である。108は口径8.9cm、器高1.6cmを測り、底部は回転ヘラ切り、板状圧痕がみられる。109は口径9.1cm、器高0.9cmを測る。底部は回転糸切り、板状圧痕がみられる。110は土師器の皿である。口径16.0cm、器高3.2cmを測る。底部は回転糸切りである。111は瓦玉とみられる。長さ24cm、幅2.5cm、厚さ1.9cmを測る。112は土錐である。にぶい黄褐色で、残存長5.0cm、最大幅3.7cm、厚さ3.4cm、重量52.7gを測る。

SK1046 (Fig.17)

調査区中央部よりやや東側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.1mを測る。東西長約1.1m×南北長約1.05mで、平面プランは円形を呈する。深さは約0.85mを測り、壁面はやや広がりながら立ち上がる。出土遺物の年代から13世紀前半と考えられる。

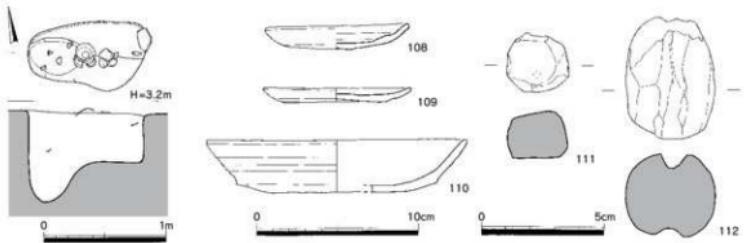


Fig.16 SK1018 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/2)

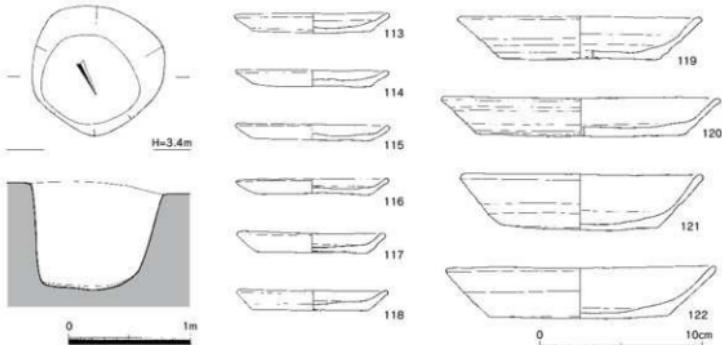


Fig.17 SK1046 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.17) 113～118は土師器の小皿である。口径9.1～9.5cm、器高1.0～1.5cmを測る。113～116の底部は回転ヘラ切り、117・118の底部は回転糸切りで、いずれも板状圧痕がみられる。119～122は土師器の皿である。口径14.9～17.2cm、器高2.3～3.4cmを測る。119・120の底部は回転ヘラ切り、121・122の底部は回転糸切りで、いずれも板状圧痕が認められる。

SK1076 (Fig.18・19 Tab.1・2)

調査区中央より北側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.0mを測る。北側は調査区外へと続く。東西長約0.7m、南北長約0.82m以上を測り、平面プランは橢円形と推定される。検出できた最底面の深さは約0.55mで、北側に向かって底面はやや高くなる。上面での検出段階から銅錢が出土し、深さ約0.4mまで銅錢の出土が認められた。銅錢は土坑内に広く散らばった状態であったが、2～3枚が鋳造した状態で出土したものもある。中には30枚が連なったものも出土し、検出時、ワラのような有機質の紐が穴に通してあるのが確認できたため、縫錢と考えられる (Tab. 1)。検出された銅錢は計118枚を数える (Tab. 2)。レベル差はあるものの土坑内全体で銅錢が出土していること、また出土枚数も100枚を超え、縫錢も検出されていることから、銅錢をまとめて埋納していた可能性が考えられる。銅錢の表面などを観察したが、木箱か麻布の袋などに入れられていた痕跡は認められなかった。出土した銅錢の年代から13世紀後半の土坑と考えられる。なお、銅錢のはかに青銅製品 (Fig.35-302) が出土している。

Tab. 1 SK1076 出土縫錢表

初鋳年	銭名	出土枚数
960年(建隆元年)	宋通元寶	1
1004年(景德元年)	景德元寶	1
1008年(祥符元年)	祥符元寶	1
1023年(天聖元年)	天聖元寶	1
1039年(寶元元年)	皇宋通寶	9
1064年(治平元年)	治平元寶	1
1068年(熙寧元年)	熙寧元寶	2
1078年(元豐元年)	元豐通寶	1
1086年(元祐元年)	元祐通寶	4
1094年(紹聖元年)	紹聖元寶	2
1101年(聖宋元年)	聖宋元寶	3
(皇)宋通寶		1
□□元寶		1
元□□寶		1
不明		1
	計	30

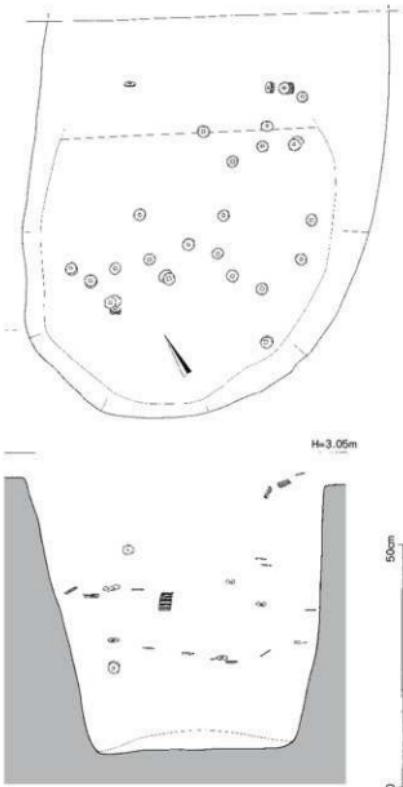


Fig.18 SK1076 実測図 (1 / 10)

Tab. 2 SK1076 出土銭貨一覧表

王朝	初鋤年	錢名	出土枚数
唐	621 年（武德元年）	開元通寶	11
	758 年（乾元元年）	乾元重寶	1
北宋	960 年（建隆元年）	宋通元寶	1
	976 年（太平元年）	太平通寶	1
	998 年（咸平元年）	咸平元寶	1
	1004 年（景德元年）	景德元寶	4
	1006 年（祥符元年）	祥符元寶	5
	1017 年（天禧元年）	天禧通寶	2
	1023 年（天聖元年）	天聖元寶	4
	1039 年（寶元元年）	皇宋通寶	19
	1056 年（嘉祐元年）	嘉祐元寶	1
	1056 年（嘉祐元年）	嘉祐通寶	1
	1064 年（治平元年）	治平元寶	4
	1068 年（熙寧元年）	熙寧元寶	6
	1078 年（元豐元年）	元豐通寶	9
	1086 年（元祐元年）	元祐通寶	8
南宋	1094 年（紹聖元年）	紹聖元寶	7
	1101 年（聖宋元年）	聖宋元寶	9
	1111 年（政和元年）	政和通寶	3
不明	1195 年（慶元元年）	慶元通寶	1
	1241 年（淳祐元年）	淳祐元寶	2
	1260 年（景定元年）	景定元寶	1
		□□元寶	1
		□宋通寶	1
		□宋□寶	1
		紹□元寶	1
		景（德）元寶	1
		元（農）通寶	1
		（聖）宋元寶	1
		（祥符）元寶	1
		□□元寶	1
		元□□寶	1
		（皇）宋通寶	1
		元（符）通寶	1
合計		（開）元通寶	1
		天□元寶	1
		不明	3
			118

出土遺物 (Fig. 19 Tab. 1・2) 出土した銅銭は銹化によって字体が判断できないものもあったが、少なくとも 22 種類確認することができる。篆書や隸書など様々な字体が認められ、142 の「慶元通寶」では背文に「六」が確認できる。銅銭の年代は最も古いもので初鋤年 621 年の「開元通寶」(Fig19-123)、最も新しいもので初鋤年 1260 年の「景定元寶」(Fig19-144) である。銅銭は 2, 3 枚が銹着した状態で検出されることが多かったが、中には 30 枚の銅銭が銹着しているものも見つかった。取り上げ時は銭の孔内にワラ状の有機質が認められたため、紐で連なった縛銭と考えられる。縛銭とした銅銭の詳細については Fig. 2 に示す。銅銭の種類については字体が判断できるものだけであるが、少なくとも 11 種類認められ、すべて北宋の銅銭であった。枚数については初鋤年 1039 年の「皇宋通寶」が最も多く、土坑全体においても同様の状況である。

123
開元通寶124
乾元重寶125
宋通元寶126
太平通寶127
威元寶128
景德元寶129
祥符元寶130
嘉祐通寶131
天聖元寶132
景祐通寶133
嘉祐元寶134
嘉祐通寶135
治平元寶136
熙寧元寶137
元豐通寶138
元祐通寶139
紹聖元寶140
聖宋元寶141
政和通寶142
廢元通寶143
淳祐元寶144
景定元寶142
廢元通寶

Fig.19 SK1076 出土錢貨拓本（原寸）

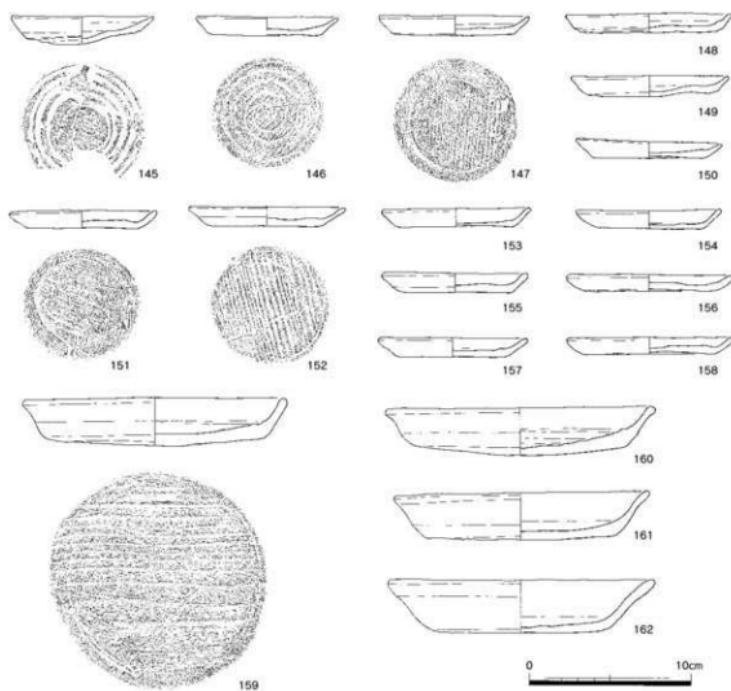
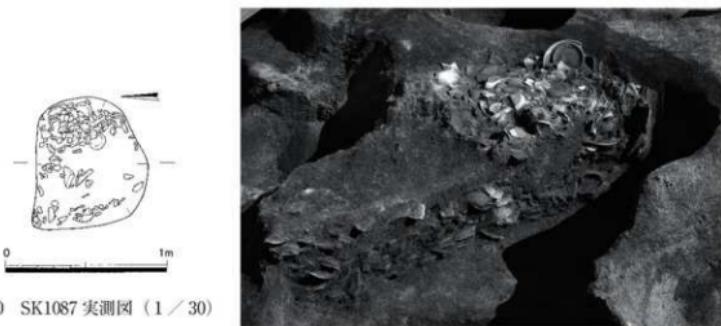


Fig.22 SK1087 出土遺物実測図 (1 / 3)

SK1087 (Fig.20~22)

調査区中央に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.0mを測る。東西長約0.8m、南北長約0.7mを測り、平面プランは隅丸の台形を呈する。土坑の深さと土器の堆積状況については図面に記録できていないが、深さは約0.5mを測る。Fig.21に示すように、土師器の皿や小皿がまとまって出土しており、土師器の廃棄土坑と考えられる。出土遺物の年代から12世紀前半と考えられる。

出土遺物 (Fig. 22) 145~158は土師器の小皿である。145~150は底部が回転ヘラ切りで148・149をのぞいて板状圧痕が認められる。145は底部が丸みを帯び、やや歪である。口径8.7~10.2cm、器高1.2~1.7cmを測る。151~158は底部が回転糸切りである。155・156をのぞき、板状圧痕が認められる。口径8.6~10.5cm、器高1.1~1.2cmを測る。159~162は土師器の皿である。159・160は底部が回転ヘラ切りでともに板状圧痕がみられる。口径16.2~16.6cm、器高3.0cmを測る。161・162は底部が回転糸切りで板状圧痕が認められる。口径15.7~16.4cm、器高3.0~3.3cmを測る。

SK1097 (Fig.23)

調査区の中央よりやや南東側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.0mを測る。東西長約0.76m、南北長約1.16mを測り、平面プランは梢円形を呈する。深さは約0.3mを測る。上層では淡黒褐色の粗砂が主体で暗黒褐色のシルトが一部混じる。下層では黒褐色砂が主体である。遺物の多くは上層の粗砂で出土した。出土遺物の年代から12世紀後半と推定される。

出土遺物 (Fig.23) 163・164は土師器の小皿である。163は完形で口径9.1cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切りである。164は口縁が大きく歪み、口径9.3~9.6cm、器高1.0cmを測る。底部には回転糸切りと板状圧痕がみられる。165・166は土師器の皿である。165は口径15.4cm、器高2.7cm、166は口径17.0cm、器高3.2cmを測り、ともに底部に回転糸切りと板状圧痕が認められる。167は平瓦である。凸面には繩タタキ痕がみられ、凹面には布目が残存している。

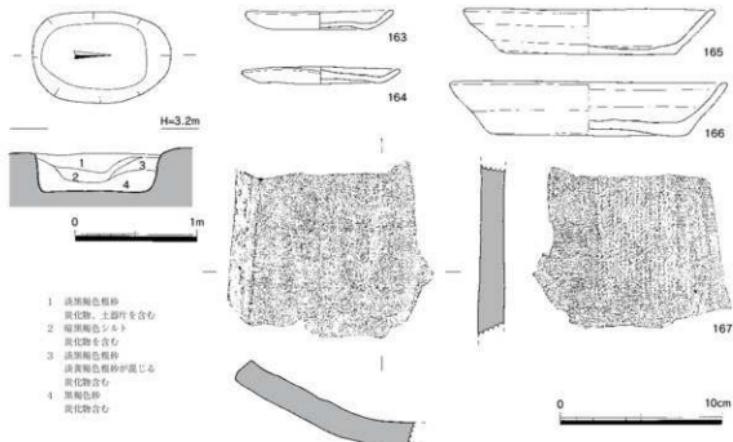


Fig.23 SK1097 実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）

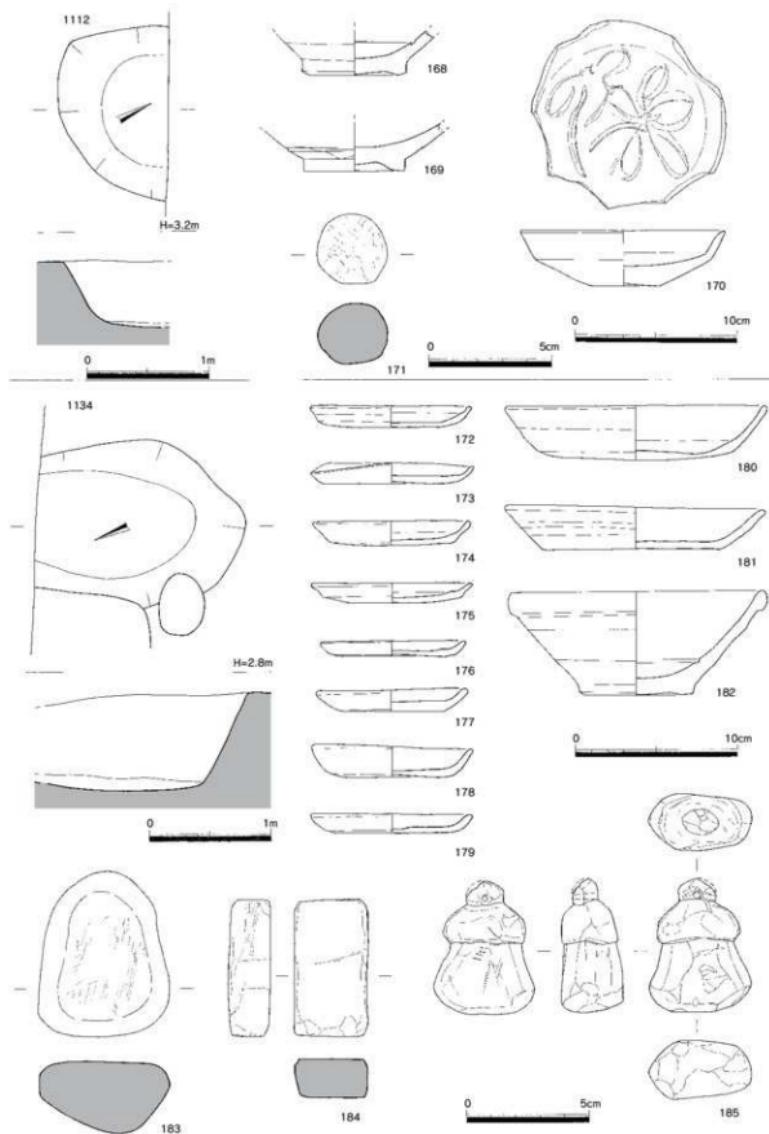


Fig.24 SK1112・1134 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK1112 (Fig.24)

調査区中央よりやや北東側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.0mを測る。北側は調査区外へと続き、東西長約1.4m、南北長0.9m以上で円形の平面プランと推定される。深さ約0.5mで壁面はやや広がりながら立ち上がる。出土遺物の年代から12世紀中頃～後半と推定される。

出土遺物 (Fig.24) 168・169は白磁の椀である。いずれも高台の削り出しは浅く、底部の器壁は厚い。体部の外面下半以下には施釉されていない。白磁椀のIV類の椀にあたるとみられる。170は龍泉窯系青磁の皿である。口径12.6cm、器高3.4cmを測る。体部中位で屈曲し、内面見込みにはヘラで片彫花文が施されている。龍泉窯系青磁皿のI類にあたる。171は球状の石製品である。凝灰岩製で重量29.2gを測る。

SK1134 (Fig.24)

調査区北側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約2.6mを測る。北側は調査区外へと続き、西側上面は別の土坑とピットに切られている。東西長約1.4m、南北長1.8mを測り、梢円形を呈すると推定される。深さ約0.8mを測り、壁面は広がりながら立ち上がっている。出土遺物の年代から12世紀前半～中頃と推定される。

出土遺物 (Fig.24 PL8) 172～179は土師器の小皿である。172～175は底部が回転ヘラ切りでいずれも板状圧痕が認められる。口径9.6～10.0cm、器高1.2～1.5cmを測る。173は口縁部が大きく歪んでいる。176～179は底部が回転糸切りで、いずれも板状圧痕が認められる。口径8.9～9.9cm、器高1.0～2.0cmを測る。180・181は土師器の皿である。180は口径16.0cm、器高3.4cmを測り、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕がみられる。181は口径16.0cm、器高2.8cmを測り、底部は回転糸切り、板状圧痕が認められる。182は白磁の椀である。玉縁状の口縁で、高台の削り出しは浅い。白磁椀のIV類にあたる。183は磨石である。閃緑岩を用い、表面のみに磨面が認められる。長さ6.8cm、幅5.3cm、厚さ3.0cmを測る。184・185は滑石製品である。184は不明石製品で、長さ5.6cm、幅3.0cm、厚さ1.7cmで長方形を呈する。185は椎である。全体的に丸みを帯びた形で、上部に2mmほどの孔が穿たれている。長さ6.5cm、最大幅4.2cm、最大厚2.4cm、重量73.7gを測る。

SK1188 (Fig.25)

調査区西側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.0mを測る。西側は調査区外へと続き、東側の上面はピットに切られる。南北長0.88m、東西長0.64m以上で円形を呈すると推定される。深さは0.8mを測り、上層で土師器の皿や小皿が多く出土した。出土遺物の年代から13世紀前半と推定される。

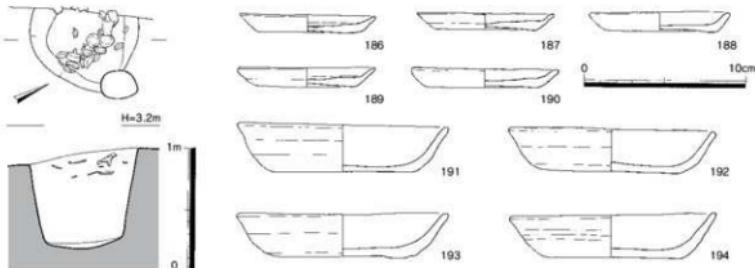


Fig.25 SK1188実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.25) 186~190は土師器の小皿である。いずれも底部は回転糸切りで、189をのぞいて板状圧痕がみられる。口径8.4~9.0cm、器高1.0~1.2cmを測る。191~194は土師器の皿である。口径12.6~13.0cm、器高2.6~3.0cmを測る。いずれも底部は回転糸切りで、192では板状圧痕がみられる。191は灯明皿として用いた可能性がある。

SK2001 (Fig.26)

調査区東側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約3.1mを測る。北側は擾乱によって削平され、西側はSE2040を切る。平面は東西長1.6m、南北長1.56mの楕円形を呈する。深さは約1.2mを測り、東側に向かって底面がやや高くなる。壁面については西側がほぼ垂直、東側は広がりながら立ち上がっている。出土遺物の年代から13世紀前半と推定される。

出土遺物 (Fig.26) 196~200は土師器の小皿である。口径8.0~9.6cm、器高1.0~1.4cmを測る。196~199は底部が回転ヘラ切りでいずれも板状圧痕が認められる。200の底部は回転糸切りである。201・202は土師器の皿である。201は口径15.2cm、器高3.6cmを測り、底部は回転ヘラ切りである。200と201は器面の付着した油炎から灯明皿として利用していた可能性がある。202は口径15.4cm、器高3.1cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が認められる。203は瓦器椀である。口径16.0cm、器高5.0cmを測り、器面の色調は灰白色を呈する。内外面ともにミガキが認められるが、外面の調整はやや粗い。204~207は白磁の椀である。204・205は玉縁状の口縁で、高台の削り出しが浅い。204では体部下半以下、205では体部中位以下に施釉されず露胎である。204・205とともに白磁椀のIV類にあたる。206は口縁部が屈折し、端部内面には棱がつく。外面に縱籠花弁文、内面に梅目文が施される。白磁椀のV類にあたる。207は口径14.8cm、器高5.2cmを測る。口縁部が弱く外反し、内面には短い梅目文が認められる。白磁椀のVI類にあたる。208・209は白磁の皿である。208は口径9.2cm、器高3.3cmを測る。口縁部の断面は三角形の玉縁状を呈し、低く厚い高台を有する。白磁皿のII類にあたる。209は口径9.8cm、器高2.7cmを測る。口縁部は直口で、体部下半には施釉されない。白磁皿のVI類にあたる。210は青磁の椀で口径18.2cm、器高9.4cmを測る。体部は丸みを有し、口縁部は弱く外反している。胎土は灰色を呈し、緑灰色の釉が全面に施釉されている。内外面に目跡を有することから重ね焼きでつくられた量産品とみられ、全体的に粗雑である。初期高麗青磁と推定される。211は陶器の盤とみられ、口縁部外面には目跡が認められる。胎土は灰色を呈し、白色粒を多く含む。212は東播系の捏鉢で、口径32.8cmと推定される。

SK2057 (Fig.27・28 PL8)

調査区北西側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約2.8mを測る。平面は東西長1.8m、南北長1.6mの楕円形を呈する。深さは約0.7mを測り、壁面は広がりながら立ち上がる。完形の土師器が多く、羽口や埴堀も出土した。廃棄土坑と考えられる。出土遺物の年代から13世紀前半と考えられる。

出土遺物 (Fig.27・28 PL8) 213~216は土師器の小皿である。口径9.1~9.9cm、器高1.1~1.4cmを測る。213・214は底部が回転ヘラ切り、215・216は回転糸切りである。いずれも板状圧痕がみられる。217~222は土師器の皿である。口径15.8~17.1cm、器高2.9~3.4cmを測る。底部は回転糸切りで、220以外は板状圧痕がみられる。220・221は外面全体に回転ナデが認められる。223は土師器の椀で、高台径は6.2cmを測る。224・225は瓦器椀である。225には低い高台が取り付けられている。高台径は224が7.4cm、225が6.8cmを測る。226~228は白磁の椀である。226は口径16.4cmを測り、胎土は灰白色で微細な黒斑が混じる。玉縁状の口縁を有し、白磁椀のIV類にあたる。227は口縁部が屈折し、上端部は水平である。口径は14.0cmを測り、胎土は灰白色を呈する。白磁椀のV類に推定され

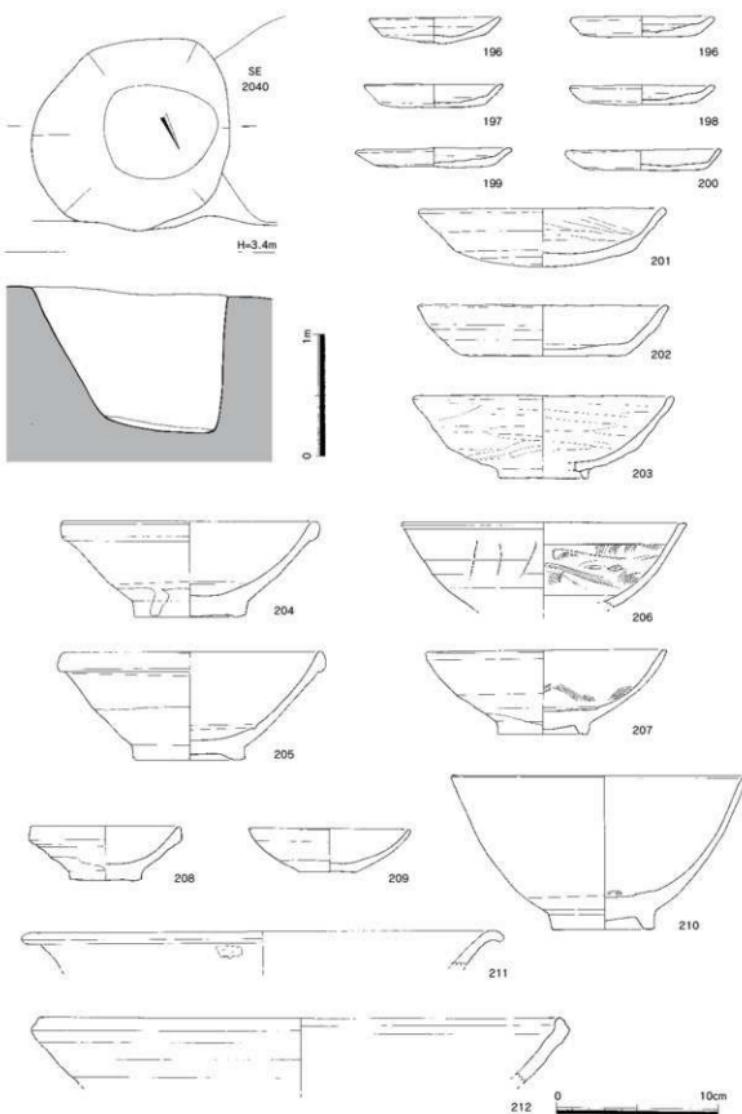


Fig.26 SK2001 実測図（1／40）および出土遺物実測図（1／3）

る。228は高台径6.4cmを測る。内面見込みの釉は環状に搔き取られ、高台の外面は露胎である。白磁碗のⅧ類にあたる。229は白磁の皿で、口径12.4cm、器高3.1cmを測る。胎土は灰色で微細な黒斑が混じる。内面には沈線状の段を有し、見込みには篦描文が施される。白磁皿のVI類にあたる。230は羽口である。直径6.0cm、残存長7.8cmを測る。胎土には白色粒を多く含み、器面は摩耗している。231は土鍤である。残存長5.7cm、最大幅3.0cm、最大厚3.2cmを測る。232は瓦玉とみられ、器面の色調は灰白色を呈する。233は球状の石製品である。砂岩製で長さ3.0cm、幅3.1cm、厚さ2.8cm、重量33.2gを測る。234は滑石製の石製品で、石鍋の再加工品とみられる。235・236は坩堝である。半球状を呈し、235の口縁部上端は丸みを帯び、236の口縁部上端は平坦である。235は内面～口縁部に、236は口縁部に被然痕跡があり、蛍光X線の分析結果から青銅の溶解に用いられたことがわかった（pp.52-55）。

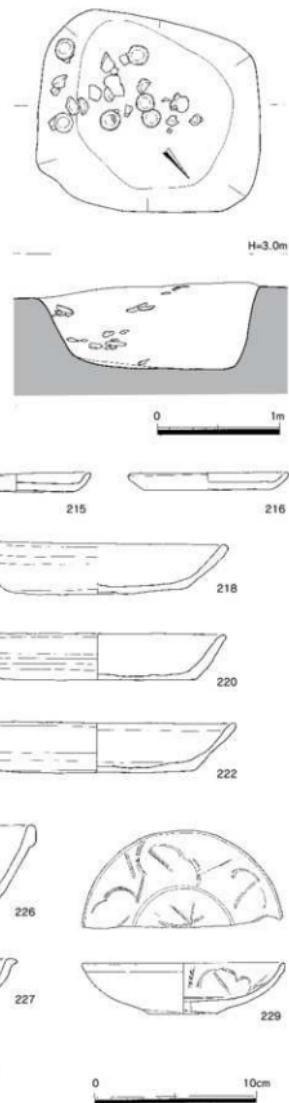


Fig.27 SK2057 実測図（1／40）および出土遺物実測図①（1／3）

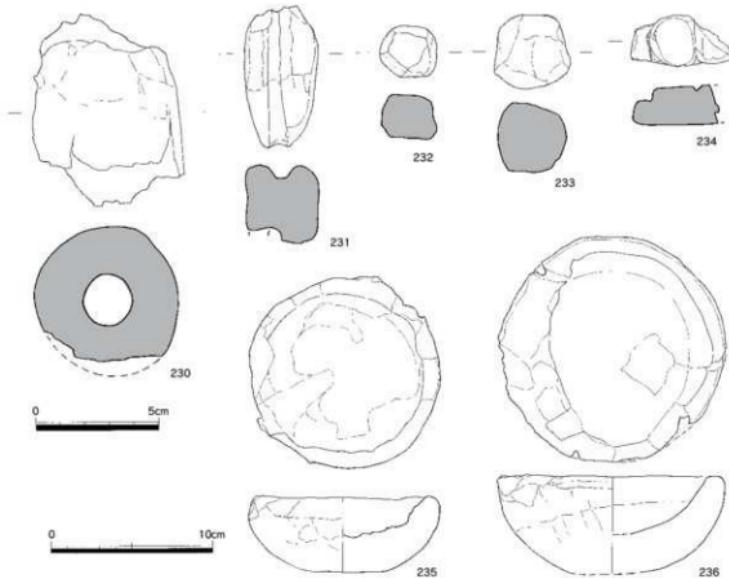


Fig.28 SK2057 出土遺物実測図② (1/2・1/3)

SK2069 (Fig.29)

調査区の南西側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約2.7mを測る。南側は調査区外へと続く。平面は東西長1.0m、南北長0.95m以上の楕円形と推定される。深さは約0.6mを測り、埋土の主体は黒褐色の粘質土であった。出土遺物の年代から13世紀前半と考えられる。

出土遺物 (Fig.29) 237～239は土師器の小皿である。口径8.2～9.2cm、器高0.9～1.0cmを測る。いずれも底部は回転糸切りで、238には板状圧痕がみられる。240は土師器の壊である。丸底で口径は15.4cmを測る。241は瓦器椀で口径13.0cmを測る。242～245は白磁の椀である。242は口径15.2cmを測り、胎土には微細な黒斑が混じる。243は玉縁状の口縁を有し、灰白色の胎土には黒斑がわずかに混じる。白磁椀のⅣ類にある。244は外面に縱横目文が認められる。245は口縁部が屈折し、内面には短い櫛目文がみられる。244・245は白磁椀のV類にある。246は白磁の皿である。口径10.0cmを測り、玉縁状の口縁を有する。白磁皿のII類にある。247は須恵器の鉢である。胎土に白色粒を多く含む。底部には回転糸切りの痕跡がみられる。

(4) 溝

SD1070 (Fig.30)

調査区の南西側に位置する。第1面で検出され、検出面の標高は約3.0mを測る。南側は調査区外へと続く、北側は攪乱によって削平されている。長さ1.9m以上、最大幅0.5m、深さは0.16mを測る。上面では60cmを超える自然石が検出された。出土遺物の年代から12世紀中頃～後半と推定される。

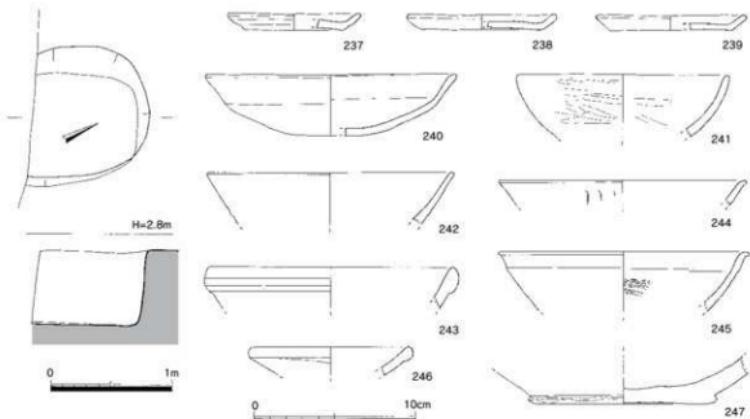


Fig.29 SK2069 実測図 (1 / 40) および出土遺物実測図 (1 / 3)

出土遺物 (Fig.30) 248・249は白磁の皿である。248は内面見込みに籠描文が施され、底部外面の釉は削り取られている。249は体部下半から露胎である。248・249は白磁皿の皿類とみられる。

SD2071 (Fig.31 PL7-2)

調査区の西側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約2.7mを測る。東側をSE1067、北側の一部上端をSE2079に切られる。やや蛇行しており、長さ4.4m以上、最大幅1.0m、深さ0.6mを測る。出土遺物の年代から12世紀中頃～後半と推定される。

出土遺物 (Fig.31 PL8) 250～256は土師器の小皿である。250の底部は回転ヘラ切り、251～256の底部は回転糸切りで板状圧痕がみられる。257～260は土師器の皿である。257の底部は回転ヘラ切りで、それ以外は回転糸切りで板状圧痕がみられる。260の底部内面には磨り跡が認められる。261・262は瓦器椀である。262では内外面にミガキの痕跡がみられる。263～265は白磁の椀である。263は玉縁状の口縁を有し、白磁椀のIV類にあたる。264は内面見込みの釉が環状に掻き取られており、白磁椀のV類にあたる。265は内外面に柳目文が施される。白磁椀のV類にあたる。266は白磁の皿で口縁は直口、底部は平底である。底部の釉は削り取られている。白磁皿の皿類にあたる。267は盤である。内面には褐釉による施文がみられる。胎土は灰色で白色粒・黒色粒を多く含む。268は陶器の鉢である。器面は灰赤色を呈し、胎土は粗く白色粒を多く含む。口縁部内面には2条の突起を有し、外面には目跡がみられる。269は石製品である。滑石製石鍋の再加工品とみられる。

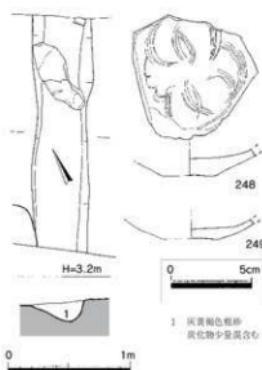


Fig.30 SD1070 実測図 (1 / 40)
および出土遺物実測図 (1 / 3)

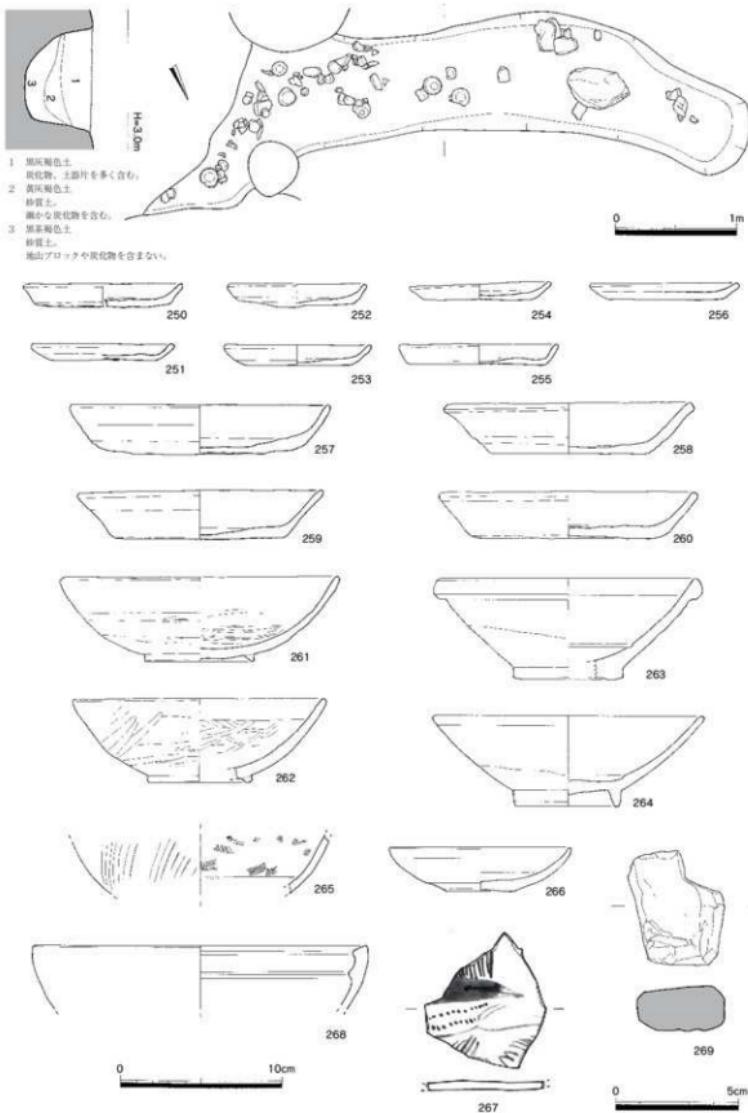


Fig.31 SD2071 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/2)

(5) ピット

SP2103 (Fig.32 PL7-3・PL8)

調査区北西側に位置する。第2面で検出され、検出面の標高は約2.5mを測る。龍泉窯系青磁の浅型椀が2点、完形の状態で出土した。出土状態から墓の副葬品の可能性が考えられたが、墓壙は検出できなかった。ただし、第1面で上面しか検出できなかったSK1133にともなう可能性も推測される。

出土遺物 (Fig.32 PL8) 270・271は龍泉窯系青磁の浅型椀である。ともに胎土は褐灰色で、明緑灰色の釉が施釉されている。外面には鎬連弁文が施される。270は口径14.8cm、器高4.2cm、271は口径14.9cm、器高3.8cmを測る。270・271はいずれも13世紀初頭～前半のものと推定される。

SP1123出土遺物 (Fig.33 PL8)

272～275は土師器の皿である。272・273の底部は回転ヘラ切り、274・275は回転糸切りで、いずれも板状圧痕がみられる。276は蛸壺で、本調査地における蛸壺の出土はこの1点のみである。器面はにぶい赤褐色を呈し、口径4.4cm、器高11.2cmを測る。体部中位には下方から穿たれた径1.0cmの孔が認められる。出土遺物の年代から12世紀前半と推定される。

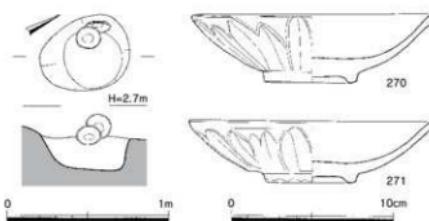


Fig.32 SP2103 実測図 (1/20)
および出土遺物実測図 (1/3)

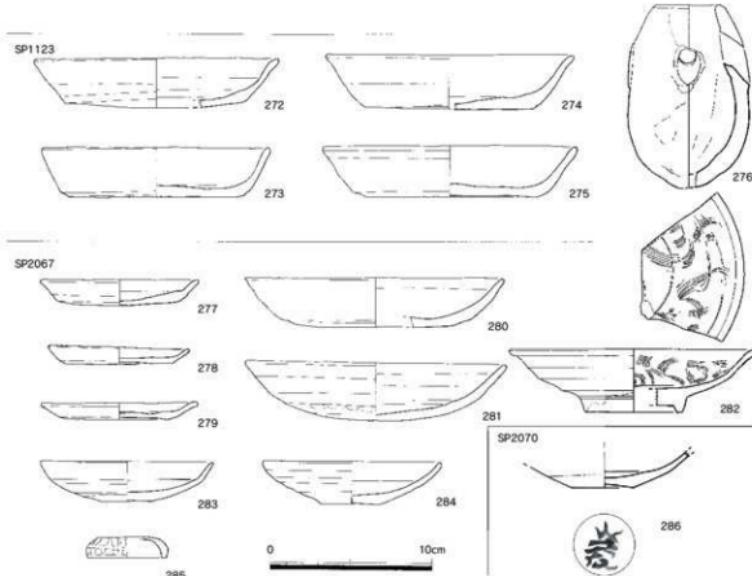


Fig.33 SP 出土遺物実測図 (1/3)

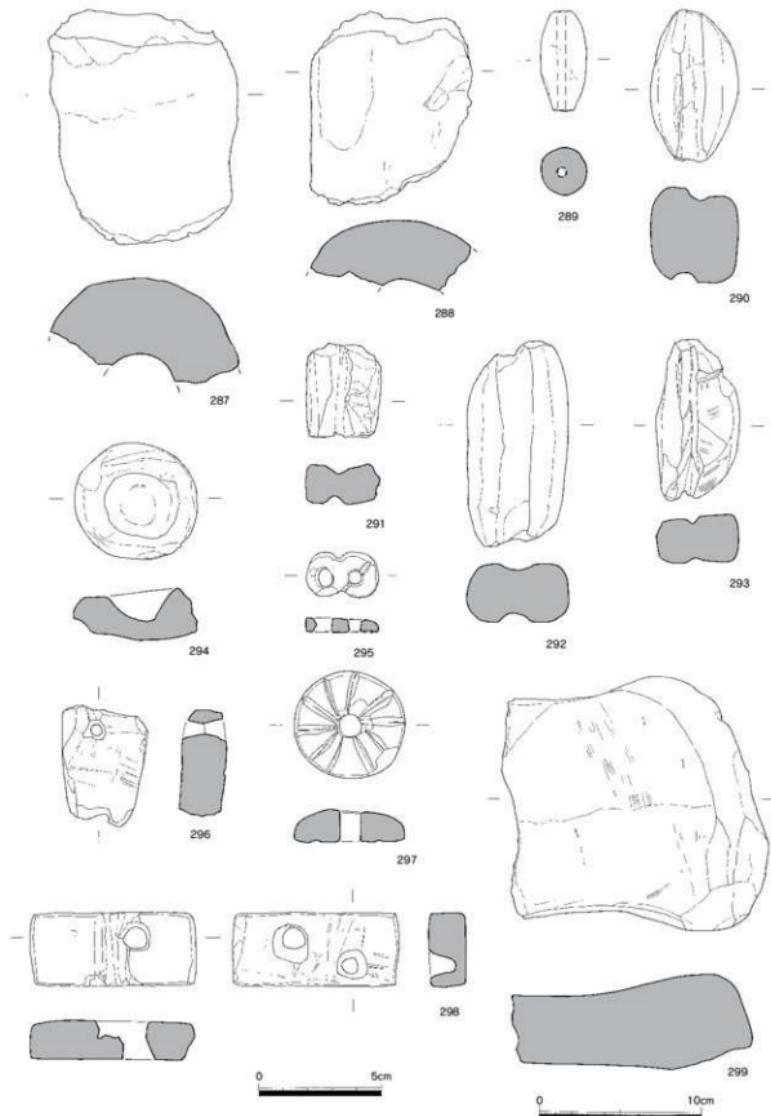


Fig.34 特殊遺物実測図① (1/2 + 1/3)

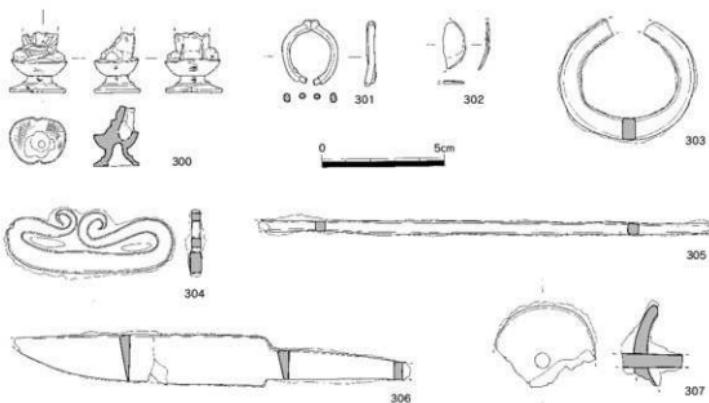


Fig.35 特殊遺物実測図② (1/2)

SP2067出土遺物 (Fig.33)

277～279は土師器の小皿である。277の底部は回転ヘラ切り、278・279は回転糸切りで、いずれも板状圧痕がみられる。280は土師器の皿で、底部は回転糸切りである。281は土師器の壊である。口径16.0cm、器高3.5cmを測る。282は白磁の椀である。口縁部は弱く外反し、内面には短い櫛目文が施される。白磁椀のVI類にある。283・284は白磁の皿である。283は白磁皿のVII類、284はVIII類と推定される。285は合子である。内面は露体で、外面には青白釉が施される。口径5.0cm、器高1.3cmを測る。出土遺物の年代から12世紀前半～中頃と推定される。

SP2070出土遺物 (Fig.33)

286は白磁の皿である。内面下位に段を有する。黄灰色の釉が施され、体部下半から底部は露胎である。白磁皿のVI類と推定される。底部には墨書が認められるが、非常に薄くなっているため、文字は判読できない。

(6) その他の遺物 (Fig.34 PL8)

287・288は羽口である。ともに胎土には白色粒を多く含む。287はSP1075、288はSK2033で出土した。289・290は土錘である。289は完形で管状を呈する。全長4.1cm、径1.9cmを測る。290は表裏に溝を有し、長さ6.2cm、最大幅3.6cm、最大厚4.0cmを測る。289はSK1143、290はSP1172で出土した。291～293は石錘である。いずれも滑石製で表裏に溝を有する。291はSK1104、292はSP1171、293はSP2106で出土した。294は凹み石とみられる。滑石製で径約5.0cm、高さ2.1cm、中央に径約2.5cmの凹みが認められる。SP1065で出土した。295は不明石製品である。滑石製で「∞」字状を呈する。表面には調整痕とみられる沈線が認められる。SP2102で出土した。296は滑石製の石錘か。上部に径0.4cmの孔が穿たれ、欠損しているが下部にも孔が穿たれていた痕跡がある。SK2052で出土した。297は滑石製の紡錘車である。直径4.5cm、孔径0.9cm、最大厚1.3cmを測る。表面には放射状に沈線が施され、裏面には環状の凹みが巡っている。298は不明石製品である。滑石製で孔が2か所に穿たれているが、1つは貫通していない。297・298はII区第1面の包含層で出土した。

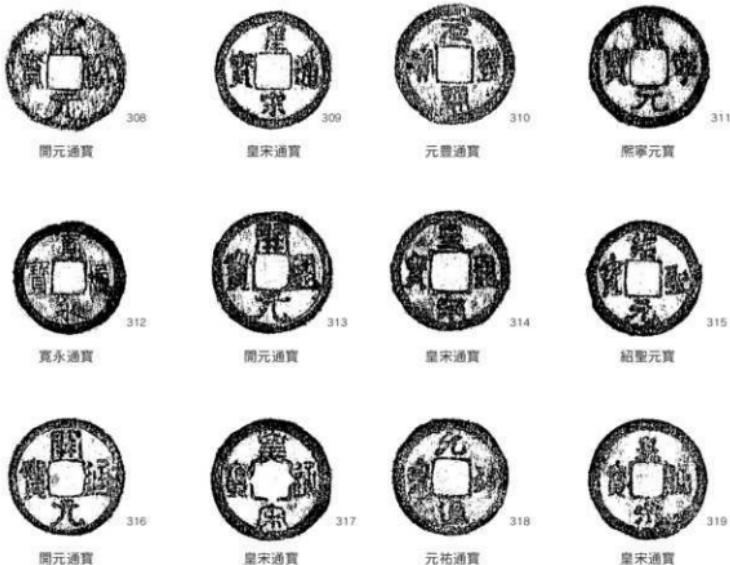


Fig.36 出土銭貨拓本（原寸）

299は磨石である。凝灰岩製で表面は凹み、研磨痕跡が認められる。最大長15.5cm、残存幅16.3cm、最大厚5.9cmを測る。SP1080で出土した。

(7) 金属製遺物 (Fig.35・36 PL8)

300は青銅製の仏像である。坐像とみられ、上半部は欠損している。残存長2.0cmを測る。背面には約0.3cmの深さの凹みが認められる。301は金銅製品で環状を呈する。300と301はII区第1面の包含層で出土した。302は青銅製の飾りであろう。残存長1.9cm、残存幅0.9cmを測り、下部は湾曲している。SK1076で出土した。303は環状の鉄製品である。長さ4.4cm、幅5.5cm、厚さ0.9cmを測る。SK1088で出土した。304は火打金である。透過X線撮影の結果、上端部が細く、非対称ではあるが左右が環状に折り曲げられていることが判明した(pp.52-55)。305は不明鉄製品である。棒状で断面は隅丸方形を呈する。残存長18.5cm、最大幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。304と305はSK1133で出土した。306は刀子で残存長16.2cmを測る。透過X線撮影を行ったが目釘穴は不明である。I区第1面包含層で出土した。307は不明鉄製品である。やや湾曲した韋状の鉄板は直径約4.2cmを測り、その中央に直径0.6cmの鉄棒が差し込まれている。I区第2面の包含層で出土した。308-319は銅銭である。308-312はSK1146で出土した。313-315はIII区第1面の包含層、316-318は擾乱、319は排土で検出された。

箱崎77次調査出土資料の保存処理と材質調査

福岡市埋蔵文化財センター 松園菜穂

1. はじめに

箱崎77次遺跡では、銭や鉄製環状製品をはじめとする多種多様な金属製品が出土している。埋蔵文化財センターでは、出土金属製品178点の保存処理を実施し、特徴的な遺物に関しては蛍光X線分析法による材質調査を実施した。以下に、その内容を報告する。

2. 金属製品の保存処理について

(1)今回の保存処理の目的と作業手順

保存処理とは、科学的な手法を用いて文化財の延命措置を施すとともに、活用し易い状態とすることを目的として行われる。金属製品においては、腐食の要件である水分や酸素を遮断するとともに、塩化物イオン等の腐食促進物質を除去し、金属製品そのものを安定化させ、合わせて合成樹脂による強化を行うことで、少しでも永く形状を保持するための作業を中心とする。

発掘調査で出土した金属製品は、埋蔵環境中と異なり常に十分な酸素供給される環境に置かれるため、腐食が進みやすい傾向にある。そのため、発見後は迅速な保存処理を実施することが望ましい。しかし、人的・時間的制約により、全ての出土金属製品に対して全工程を施すことが現状では難しい。そこで今回は、銭を中心に、透過X線撮影で形状や文字等を確認後、土や鏽に覆われた出土金属製品が、本来の形状に近い状態で観察できるようにクリーニングを優先的に実施した。

作業工程は、①事前調査、②クリーニング、③事後調査である。

事前調査では、まず目視による出土金属製品の観察後、クリーニング前の記録を撮るために写真撮影を実施し、透過X線撮影による形状観察後、病院でいうところのカルテにあたる保存処理カードを作成した。透過X線撮影で使用した機器は、埋蔵文化財センター設置の透過X線撮影装置(YEXLON社製MG226)である。材質調査については、微小部領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(AMETEK EDAX社製 Orbis)を使用した。蛍光X線分析法の概要と分析結果については次章で述べるため、ここでは割愛する。

クリーニングは、変性アルコール(商品名ソルミックス)に筆を浸し出土金属製品の表面を洗浄後、竹串やメス等を用いて不必要な土や鏽を除去し、本来の形状を損なう鏽等はグラインダーで除去した。事後調査では、クリーニング後の記録をするために写真撮影を実施した。

処理の実施によって、金属製品の形状回復や遺存が良好な銭は文字の判読が可能となった。今回の作業で、クリーニングを優先的に実施したが、今後は急激な腐食の進行が予想される遺物を中心に速やかに脱塩処理による安定化処置や樹脂含浸を実施する予定である。

(2)保存処理で発見された遺物について

今回、処理を実施した金属製品の中に特筆すべき遺物があったので以下に紹介する。本資料は当初、土や鏽に覆われていたため、形状や用途を想定するのは困難であったが、透過X撮影を実施したところ、火打ち金であることが明らかになった(PL8-304)。

火打ち金とは、火打ち石に叩きつけて火花を起こすための発火道具である。今回見つかったものは、山型という型式に分類される。これまでに福岡市では箱崎遺跡26次や吉塚祝町遺跡2次などで出土例があるが(松浦2004、星野2006)、いずれも山型火打ち金である(高嶋1985)。しかし、既出の火打ち金とは形状が異なり、両端を細くした板棒状の鉄の両端を折り曲げ、頂部を環状に加工している。今回発

見された火打ち金は、12世紀後半から13世紀頃の時期の遺構から出土したのだが、よく似た形状で同時期のものと見られる資料が、長崎県松浦市に所在する鷹島神崎遺跡で出土している¹¹⁾。鷹島神崎遺跡は元寇に際して、元軍の船が沈没した場所とされ、海底から沈没船とともに武器や生活用具が発見されている。火打ち金もその中の一つであり、箱崎77次出土資料との関連性が注目される。

3. 非鉄金属資料の材質調査

文化財に対して自然科学的な手法を応用すると、豊富な情報を引き出すことができることは、広く知られているところである。出土遺物の中から、特徴的な非鉄金属製品2点と埴塙1点について、その材質調査を目的として、非破壊で材質の傾向を知ることができる蛍光X線分析法を実施した。

(1)今回分析を行う出土金属製品3点について

今回、対象とした3点の遺物は、いずれも中世期の遺構から出土したものである。金属製品は、1点は環状製品(PL 8-301)、もう1点が仏像(PL 8-300)である。目視の観察では、環状製品は一部に金色を呈するものが地金の直上に存在する様子が認められ、仏像は上半身から頭部に当たる部分が欠損している。また、埴塙(PL 8-235)は内側から口縁部にかけて被熱痕跡があり一部ガラス化している。溶解した金属由来すると見られる赤色や黒色を呈する部分が見られる他、緑青の存在も確認できる。

(2)調査方法

蛍光X線分析法は、強いX線を試料に照射した時、照射された部分に存在する元素が固有のX線(特性X線または二次X線)を出す性質を利用して、試料を構成している元素の種類や量を調べるために用いられる。

調査で使用した機器は、微小部領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(AMETEK EDAX社製 Orbis)である。分析前に、出土遺物を変性アルコール(商品名ソルミックス)と筆でクリーニング後、蛍光X線分析法を実施した。分析条件は、電圧：50KV／電流：1000mA／対陰極：ロジウム(Rh)／検出器：シリコンドリフト検出器／測定雰囲気：大気／測定範囲：300 μm、1 mm、2 mm／測定時間：300秒である。

文化財は工業製品と異なり形状や組成が不均一であることが多く、埋蔵文化財では埋蔵環境中の化学変化により組成が変質している場合がほとんどである。また、土壌などの影響も少なからず生じるため、得られた結果が必ずしも本来の値を示すとは限らない。しかしながら、分析前に試料表面を洗浄するなどの処置を行ったうえで、含まれる元素を定性的に把握すれば資料を構成する元素の傾向を知る上では有効な手段といえる(村上2002)。

以上を踏まえて本調査では、対象資料を変性アルコールで洗浄した上で分析を行い、得られた結果は定性的に示すに留める。

(3)結果

材質調査を目的として蛍光X線分析を行った結果を、遺物ごとに項目をわけて以下に述べる。

(3)-1. 環状製品の分析結果

地金の部分	Cu(>Fe)>Pb (>Au)>Ag
金色を呈する部分	Cu>Au>Pb (>Fe)>Hg>Ag

環状製品は、目視による観察で地金直上に金色を呈する様子が認められていた。地金の部分を分析した結果、銅(Cu)が顕著に認められ、他に鉛(Pb)が明瞭なピークとして認められた(Fig.37-(1))。したがって、銅(Cu)を主体としながら鉛(Pb)を含む青銅製と推定される。

また、金色を呈する部分を分析したところ、地金部分ではほとんど見られなかった金(Au)が顕著に認められ、水銀(Hg)のピークも検出された(Fig.37-(2))。この結果から環状製品は、青銅製の地金に、金と水銀で鍍金を施した金銅製品であることが明らかとなった。この他、地金部分と鍍金部分どちらからも微量の銀(Ag)が認められるが、検出量はさほど変わらない。したがって、この銀(Ag)は地金由来の微量元素と推定される。分析で検出された鉄(Fe)に関しては、上記と同様に土壌由来の可能性が否めないため今回は検討しない。

(3)-2 仏像の分析結果

仏像



分析結果(Fig.38)より、仏像は銅(Cu)を主体としながら鉛(Pb)とスズ(Sn)を含む青銅製と推定される。また、鉄(Fe)も検出されているが、土壌由来の可能性が否めないため今回は検討しない。

(3)-3 塙の分析結果

塙



金属の溶解に用いられたとみられる塙が、どのような材料を溶かしていたのか推定するために分析を行った。その結果(Fig.39)、今回分析を行った塙は銅(Cu)を主体としながら鉛(Pb)とスズ(Sn)が含まれている青銅を溶解したものと推察される。また、ピークとしては微弱ながら、ヒ素も含まれていると思われる。その他に、鉄(Fe)のピークが認められるが、目視観察で金属の付着がないような素地の部分でも同様に鉄(Fe)のピークが顕著に認められることから、土壌由来の可能性が高いと推定される。

4. まとめ

保存処理により、鷹島神崎遺跡との関連性が想定される火打ち金が発見された。また、今回実施した塙を含む非鉄金属資料3点の材料調査では、いずれも青銅であったが、その組成はすべて異なるものであった。中世の非鉄金属の多様性がうかがえる結果といえよう。

(参考文献)

高嶋幸男「火の道具」1985 柏書房

星野恵美「吉塚祝町2 吉塚祝町遺跡第2次調査報告書 福岡市埋蔵文化財調査報告書第912集」福岡市教育委員会2006

松浦一之介「箱崎21 箱崎遺跡第26次調査報告書(1) 箱崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第815集」福岡市教育委員会2004

村上隆「蛍光X線分析における諸問題」奈良国立文化財研究所「保存科学研究集会2000 非破壊手法による考古資料の分析・観察」2000奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター

(註)松浦市ホームページ掲載の情報による

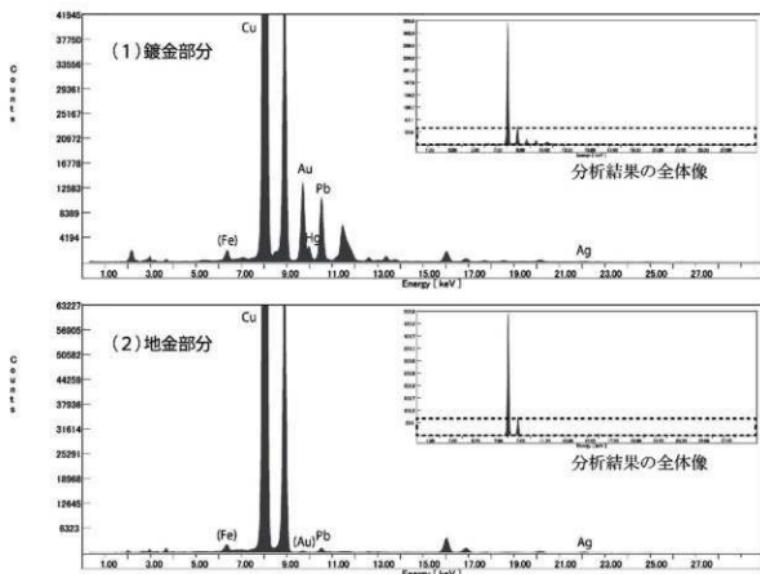


Fig.37 金銅製環状製品の蛍光X線分析結果

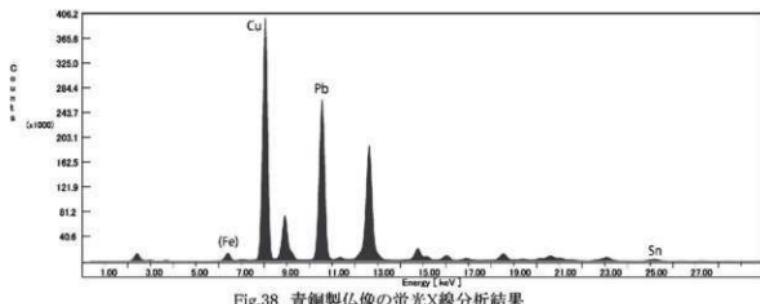


Fig.38 青銅製仏像の蛍光X線分析結果

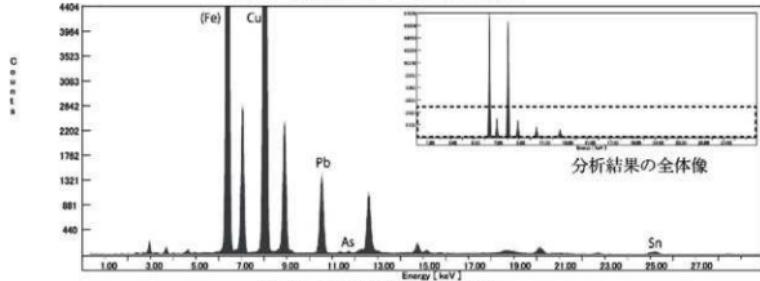


Fig.39 埴塙の蛍光X線分析結果

4. 小結

箱崎遺跡第77次調査では11世紀後半から13世紀代の遺構や遺物を多く検出することができた。以下では特筆すべき遺構や遺物を中心に調査成果をまとめて述べる。

(1) 遺構について

主な遺構は建物跡、井戸、溝、土坑などである。建物跡は2棟検出された。規模は異なるものの、2棟は隣接しており、建物の向きもほぼ揃っている。出土遺物からSB01については12世紀前半、SB02については11世紀後半～12世紀前半の時期と推定され、同時に建っていた可能性が考えられる。遺構の形状や規模などから、蔵のような建物の跡と想定される。井戸は計8基検出されているが、建物跡と同時に推定される井戸は建物跡が位置する南側にはつくられず、主に北側に位置している。建物跡は第1面で検出されているが、下面にある第2面においてもその位置に井戸はつくられていない。のことから、この時期の居住域における建物や井戸の配置を想定することができる。

井戸については井筒を検出できたもののうち、その多くが板材を組み合わせた結構を用いていたが、SE2085では木材の出土状況から方形の井戸枠を組み、その中央に曲物を据えたものと推定される。土坑は多く検出されたが、SK1067では銅鏡が118枚出土した。調査区外に土坑が続くため、銅鏡の枚数はそれ以上あった可能性が高い。銅鏡の年代については最も古いもので初鑄年621年の「開元通寶」、最も新しいもので初鑄年1260年の「景定元寶」で、土坑の時期は13世紀後半と考えられる。30枚が連なった縹錠と推定されるものもあり、木箱か袋にいれて埋納されていたと想定される。なお、土師器の集積遺構については調査区の中央付近で1基検出されている。また、繩の羽口や青銅の鋳造に用いられた坩堝が廃棄された土坑が1基検出されている。出土遺物の年代から13世紀前半の時期と推定され、その時期に本調査地あるいは周辺において鋳造が行われていた可能性が考えられる。

(2) 遺物について

土師器や白磁・青磁などの輸入陶磁器、瓦器、滑石製の石製品や青銅製品、鉄器などが出土した。金属製品については銅製の仏像や金銅製品などが出土しているが、特筆すべき遺物としてSK1113で検出された火打金がある。X線透過撮影を行った結果、その形状が判明し、長崎県松浦市に所在する鷹島神崎遺跡出土例と類似していることがわかった。箱崎遺跡ではこれまで山形を呈す火打金が何例か出土しているものの、両端部を鉤状に曲げた形態のものは見つかっていなかった。鷹島神崎遺跡に関しては元寇に際して、元軍の船が沈没した場所と推定され、海底から沈没船とともに武器や生活用具が発見されている。火打金もその中の一つであり、「てはつう」の着火に使用されていた可能性も考えられている。13世紀後半には、箱崎遺跡西側の海岸線最前列の砂丘に元寇防壁が築かれ、砂丘西側緩斜面では13世紀後半代において焼土整地層が形成されている。これは1274年の文永の役の焼き討ちによるものと考えられ、宮崎宮とその一帯が焼失したことを示唆している。火打金が出土したSK1113については明確な遺構として捉えられなかつたが、火打金とともに出土した土師器などから12世紀～13世紀と考えられる。本調査地において焼土整地層は検出されていないが、火打金の存在から少なからず元寇との関連性を伺うことができる。今後の周辺調査の進展によって出土事例が増加する可能性も高く、遺跡全体で再度検討を行う課題であると言えよう。



1 I区第1面全景（北西から）



2 I区第2面全景（北西から）



1 II区第1面全景（北西から）



2 II区第2面全景（北西から）



1 Ⅲ区第1面全景（北西から）



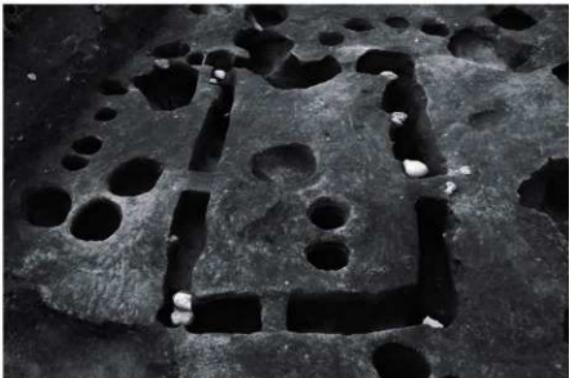
2 Ⅲ区第2面全景（北西から）



1 IV区第1面全景（南東から）



2 IV区第2面全景（南東から）



1 SB01 (東から)



2 I区 SB02 (北から)



3 II区 SB02 (西から)



1 SE1067 (南東から)



2 SE1183・1189 (南から)



3 SE2040 (北から)



1 SE2085 (北から)



2 SD2071 (西から)



3 SP2103 (東から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はこざき55							
書名	箱崎55							
副書名	—箱崎遺跡第43次・77次調査の報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1345集							
編著者名	大塚紀宣・松崎友理（編）							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2018年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
はこざきいせき 箱崎遺跡 第43次	ふくおかけんふくおかしひがしく 福岡県福岡市東区 はこざき1ちょううめ2007-1 箱崎1丁目2697-1	40131	2639	33° 37° 00"	130° 25° 24"	2003.11.21 ～ 2003.12.15	83.1	記録保存 調査
はこざきいせき 箱崎遺跡 第77次	ふくおかけんふくおかしひがしく 福岡県福岡市東区 はこざき1ちょううめ2708-1 箱崎1丁目2708-1	40131	2639	33° 37° 01"	130° 25° 25"	2015.08.20 ～ 2016.02.10	333	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
箱崎遺跡第43次	集落	中世	土坑、溝状遺構	土師器、須恵器、白磁、青磁、陶器、銅製品	銅鏡			
箱崎遺跡第77次	集落	中世	建物跡、井戸、土坑、溝	土師器、須恵質土器、瓦器、白磁、青磁、瓦、石製品、銅製品、鉄製品	銅鏡、火打金、青銅製仏像			
要約	第43次調査では褐色砂層の上面で土坑や溝状遺構、柱穴などを検出した。出土遺物の年代から12世紀代と推定され、遺物の量はパンケース5箱分である。 第77次調査では褐色砂層と黄褐色砂層（地山）の2面で遺構を検出した。11世紀後半～13世紀にあたる遺構や遺物が多く、主な遺構としては建物跡2棟や井戸、溝、土坑などが挙げられ、建物跡は蔵の可能性がある。遺物の量はパンケース79箱分で、特筆すべき遺物として、火打金や青銅製の仏像がある。							

箱崎 55

—箱崎遺跡第43次・77次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1345集

2018年3月26日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 (株) 大里印刷センター

福岡市東区二又瀬新町12-29

